

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

ペティス・ド・ラ・クロワ版『シンドバード航海記』より：第一航海の翻訳と注解

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館 公開日: 2024-01-10 キーワード (Ja): アラビアンナイト 千一夜物語 フランソワ・ペティス・ド・ラ・クロワ シンドバード アラブ文学 キーワード (En): 作成者: 西尾, 哲夫, 岡本, 尚子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/0002000077

資料 Research Resource

ペティス・ド・ラ・クロワ版『シンドバード航海記』より
第一航海の翻訳と注解

西尾哲夫* ・ 岡本尚子*

Premier voyage de l'*Histoire arabe de Sindabad Le Marin*
par François Pétis de La Croix:
Traduction japonaise et annotations

Tetsuo Nishio et Naoko Okamoto

- | | |
|------------------------------|---------------------------|
| 1 はじめに | 3.3 ド・ラ・クロワ版の特徴 |
| 2 写本の分類と系統 | 4 ド・ラ・クロワ版とシンドバード航海記の成立過程 |
| 3 シンドバード航海記の新たな系統 | 5 本文訳ならびに注釈 |
| 3.1 ド・ラ・クロワの生涯と著作 | |
| 3.2 ペティス・ド・ラ・クロワの『シンドバード航海記』 | |

*国立民族学博物館

Mots-clés : Arabian Nights, Mille et une nuits, François Pétis de La Croix, Sindbad, littérature arabe

キーワード : アラビアンナイト, 千一夜物語, フランソワ・ペティス・ド・ラ・クロワ, シンドバード, アラブ文学

1 はじめに

「シンドバード航海記」はアントワヌ・ガランによってフランス語に翻訳され、1704 年から刊行されはじめた『千一夜物語』の第 3 巻に入れられた¹⁾。しかし、ガランが所有し翻訳の底本として使ったアラビア語写本²⁾の中に、この物語は入っていない。この物語は、ガランが『千一夜物語』よりも前に手に入れた写本に基づくもので、ガランは 1698 年頃にはこの物語を翻訳していた。「シンドバード航海記」を出版する直前に、この物語が千一夜物語（以下では総称としてアラビアンナイトと呼ぶ）と呼ばれるアラブの長大な物語集の一部であると知ったガランは、この物語集の写本をアレppoから入手し、それをフランス語に翻訳して 1704 年に出版した。15 世紀のものと思われるこの写本（ガラン写本）は、アラビアンナイトの最も古い写本とされている。

以下の表は、ガランが翻訳した『千一夜物語』とガラン写本に収録された物語を比較したものである。

ガラン訳の第 1 巻と第 2 巻は基本的にガラン写本の第 1 巻に対応している。と

表 1 ガラン版千一夜物語とガラン写本の対応表

ガラン版千一夜物語 12 巻	ガラン写本 3 巻(①~③は巻数)	ガラン版千一夜物語 12 巻	ガラン写本 3 巻(①~③は巻数)
第 1 巻： 第 1 夜~第 30 夜 O 侯爵夫人への献辞 告知文 下一夜、アラブの国 ガラスの瓶に閉じ込められた娘の話 ロバと牛と象の競走 犬と鳥の競走 魔人と婦人の話 第一の老人と第二の老人の話 第三の老人と第二の老人の話 第四の老人と第二の老人の話 第五の老人と第二の老人の話 第六の老人と第二の老人の話 第七の老人と第二の老人の話 第八の老人と第二の老人の話 第九の老人と第二の老人の話 第十の老人と第二の老人の話 第十一の老人と第二の老人の話 第十二の老人と第二の老人の話 第十三の老人と第二の老人の話 第十四の老人と第二の老人の話 第十五の老人と第二の老人の話 第十六の老人と第二の老人の話 第十七の老人と第二の老人の話 第十八の老人と第二の老人の話 第十九の老人と第二の老人の話 第二十の老人と第二の老人の話 第二十一の老人と第二の老人の話 第二十二の老人と第二の老人の話 第二十三の老人と第二の老人の話 第二十四の老人と第二の老人の話 第二十五の老人と第二の老人の話 第二十六の老人と第二の老人の話 第二十七の老人と第二の老人の話 第二十八の老人と第二の老人の話 第二十九の老人と第二の老人の話 第三十の老人と第二の老人の話	第 1 巻： 第 1 夜~第 30 夜 (途中) シヤフリヤールとシエヘラードの物語 ロバと牛の物語 第一の老人の物語 第二の老人の物語 第三の老人の物語 ユーナン王とローレン王の物語 第四の老人の物語 第五の老人の物語 第六の老人の物語 第七の老人の物語 第八の老人の物語 第九の老人の物語 第十の老人の物語 第十一の老人の物語 第十二の老人の物語 第十三の老人の物語 第十四の老人の物語 第十五の老人の物語 第十六の老人の物語 第十七の老人の物語 第十八の老人の物語 第十九の老人の物語 第二十の老人の物語 第二十一の老人の物語 第二十二の老人の物語 第二十三の老人の物語 第二十四の老人の物語 第二十五の老人の物語 第二十六の老人の物語 第二十七の老人の物語 第二十八の老人の物語 第二十九の老人の物語 第三十の老人の物語	第 2 巻： 第 31 夜~第 60 夜 王子である第一の遊行者の物語 王子である第二の遊行者の物語 王子である第三の遊行者の物語 王子である第四の遊行者の物語 王子である第五の遊行者の物語 王子である第六の遊行者の物語 王子である第七の遊行者の物語 王子である第八の遊行者の物語 王子である第九の遊行者の物語 王子である第十の遊行者の物語 王子である第十一の遊行者の物語 王子である第十二の遊行者の物語 王子である第十三の遊行者の物語 王子である第十四の遊行者の物語 王子である第十五の遊行者の物語 王子である第十六の遊行者の物語 王子である第十七の遊行者の物語 王子である第十八の遊行者の物語 王子である第十九の遊行者の物語 王子である第二十の遊行者の物語 王子である第二十一の遊行者の物語 王子である第二十二の遊行者の物語 王子である第二十三の遊行者の物語 王子である第二十四の遊行者の物語 王子である第二十五の遊行者の物語 王子である第二十六の遊行者の物語 王子である第二十七の遊行者の物語 王子である第二十八の遊行者の物語 王子である第二十九の遊行者の物語 王子である第三十の遊行者の物語	第 2 巻： 第 31 夜~第 60 夜 (途中) 王子である第一の遊行者の物語 王子である第二の遊行者の物語 王子である第三の遊行者の物語 王子である第四の遊行者の物語 王子である第五の遊行者の物語 王子である第六の遊行者の物語 王子である第七の遊行者の物語 王子である第八の遊行者の物語 王子である第九の遊行者の物語 王子である第十の遊行者の物語 王子である第十一の遊行者の物語 王子である第十二の遊行者の物語 王子である第十三の遊行者の物語 王子である第十四の遊行者の物語 王子である第十五の遊行者の物語 王子である第十六の遊行者の物語 王子である第十七の遊行者の物語 王子である第十八の遊行者の物語 王子である第十九の遊行者の物語 王子である第二十の遊行者の物語 王子である第二十一の遊行者の物語 王子である第二十二の遊行者の物語 王子である第二十三の遊行者の物語 王子である第二十四の遊行者の物語 王子である第二十五の遊行者の物語 王子である第二十六の遊行者の物語 王子である第二十七の遊行者の物語 王子である第二十八の遊行者の物語 王子である第二十九の遊行者の物語 王子である第三十の遊行者の物語
第 3 巻： 第 61 夜~第 100 夜 告知文 魔人のシンドバードの物語 第一のシンドバードの物語 第二のシンドバードの物語 第三のシンドバードの物語 第四のシンドバードの物語 第五のシンドバードの物語 第六のシンドバードの物語 第七のシンドバードの物語 第八のシンドバードの物語 第九のシンドバードの物語 第十のシンドバードの物語 第十一のシンドバードの物語 第十二のシンドバードの物語 第十三のシンドバードの物語 第十四のシンドバードの物語 第十五のシンドバードの物語 第十六のシンドバードの物語 第十七のシンドバードの物語 第十八のシンドバードの物語 第十九のシンドバードの物語 第二十のシンドバードの物語 第二十一のシンドバードの物語 第二十二のシンドバードの物語 第二十三のシンドバードの物語 第二十四のシンドバードの物語 第二十五のシンドバードの物語 第二十六のシンドバードの物語 第二十七のシンドバードの物語 第二十八のシンドバードの物語 第二十九のシンドバードの物語 第三十のシンドバードの物語	第 3 巻： 第 61 夜~第 100 夜 (途中) 第一のシンドバードの物語 第二のシンドバードの物語 第三のシンドバードの物語 第四のシンドバードの物語 第五のシンドバードの物語 第六のシンドバードの物語 第七のシンドバードの物語 第八のシンドバードの物語 第九のシンドバードの物語 第十のシンドバードの物語 第十一のシンドバードの物語 第十二のシンドバードの物語 第十三のシンドバードの物語 第十四のシンドバードの物語 第十五のシンドバードの物語 第十六のシンドバードの物語 第十七のシンドバードの物語 第十八のシンドバードの物語 第十九のシンドバードの物語 第二十のシンドバードの物語 第二十一のシンドバードの物語 第二十二のシンドバードの物語 第二十三のシンドバードの物語 第二十四のシンドバードの物語 第二十五のシンドバードの物語 第二十六のシンドバードの物語 第二十七のシンドバードの物語 第二十八のシンドバードの物語 第二十九のシンドバードの物語 第三十のシンドバードの物語	第 4 巻： 第 101 夜~第 140 夜 ナーレディン・アリとヘドレディン・ハッサンの物語 三つの子の物語 (続わり) せむしの物語 キリスと義経の物語 カスガルのスルタンのおおむねによって語られた物語 エデヤ人の使者が語った物語 住居が語った物語	第 4 巻： 第 101 夜~第 140 夜 (途中) ナーレディン・アリとヘドレディン・ハッサンの物語 三つの子の物語 (続わり) せむしの物語 キリスと義経の物語 カスガルのスルタンのおおむねによって語られた物語 エデヤ人の使者が語った物語 住居が語った物語

シンドバード航海記の複数写本から創作?

底本が未確定の物語

カマルツァマーンの物語とガーニムの物語は底本が未確定

ペティス・ド・ラ・クロワの『千一夜物語』から出版社が勝手に転用

目覚めて眠る者の物語は底本写本候補が幾つかあるが未確定

《孤児の物語》群はハンナ・ディヤブというアレppo出身の語り部が語ったとされ、ガランの日記の中にその梗概が記されている

(筆者作成)

ころが、ガラン訳第3巻には「シンドバード航海記」が含まれているが、ガラン写本には含まれておらず、現在でもガランがどのアラビア語写本を底本としていたかは不明である³⁾。

ここで、二つの疑問が浮かびあがる。第一に、シンドバード航海記は、ガランが証言するようにもともとアラビアンナイト（千一夜物語）に入っていた物語なのだろうか？ブーラク版やカルカット第二版などの標準的な印刷版テキストをはじめ、それらの底本となったエジプト系写本には、シンドバード航海記が含まれている。一方で、アラビアンナイトからは独立して伝承されてきたシンドバード航海記も存在しているのである。

もしシンドバード航海記がもともとはアラビアンナイトには含まれていなかったとしたら、いつ、どのようにしてアラビアンナイトに取り入れられたのかというのが、第二の疑問である。アラビアンナイトのエジプト系テキスト伝承は、ガラン版から大きな影響を受けている可能性が高く、シンドバード航海記をアラビアンナイトの中の一つの物語とするのも後代の影響によるものであり、もともとはアラビアンナイトとは別個に伝わる物語だったのではないだろうか。

2 写本の分類と系統⁴⁾

当時知られていたすべての写本を研究したカザノヴァによると、シンドバード航海記の写本には二つの系統があるとされる（Casanova 1922）。彼がA系統と呼んだテキスト伝承には、ガラン訳シンドバード航海記をはじめ、ラングレー版（Langlès 1814）、そしてラングレー版をほぼそのままアラビアンナイト本文に採用したカルカット第一版などがある。さらにはカザノヴァの研究以降、特に近年になって発見された写本についてもほとんどがA系統に属する。またB系統のテキスト伝承に属する代表的なものとしては、ブーラク版やカルカット第二版があげられる。

両系統のあいだにはまずテキスト伝承の形式面で大きな違いがある。まず、B系統のテキストは、アラビアンナイト本文を構成する物語となっており、夜番号が付されている。一方A系統の場合は、パリのフランス国立図書館が所蔵する写本（Arabe 3615）⁵⁾には、唯一夜番号が挿入されてアラビアンナイト本文に取

り入れられているが、それ以外のすべてのテキストには夜番号が付されておらず、単独の物語テキストとして伝承されてきたものと推定される。

両系統のもう一つの大きな違いは、登場人物の綴りのゆれの有無である。たとえば「シンドバード」という名前についていうと、B 系統の場合は、「シンドバード (Sindbādh)」となっている二つの写本（フランス国立図書館所蔵 Arabe 3648 と、エアフルト大学ゴータ研究図書館所蔵 Ms. orient. A 2650）を除いて、基本的に「シンドバード (Sindbād)」となるか、あるいは「海のシンドバード」を意味する「シンドバード・アルバフリー (Sindbād al-Bahrī)」となっている。他方、A 系統の場合は「シンドバープ (Sindbāb)」、*「シンドバート (Sindbāt)」「シンドバーン (Sindbān)」*などと表記されている。A 系統に属するガラン版で「ヒンドバード・アルハンマール (Hindbād al-Ḥammāl)」つまり「荷担ぎのヒンドバード」と表記されている聞き役が、B 系統ではほとんどの場合「シンドバード・アルバリー (Sindbād al-Barrī)」つまり「陸のシンドバード」となっている。しかしながら A 系統では揺れが大きく「ヒンドバープ (Hindbāb)」、*「ヒンドバート (Hindbāt)」、*「ヒンドバーン (Hindbān)」などとなっている。なかには、「荷担ぎのヒンドバード」と「陸のヒンドバード」を併用しているものもある。つまり、A 系統では名前の表記にゆれがあるが、B 系統ではほぼ統一されているのである。

B 系統の本文は A 系統に比べると、物語の展開において細部に至るまでほとんど異同がないことも特徴である。特に第六航海の終わりから第七航海全体については、A 系統と B 系統でまったく異なっているだけでなく、B 系統に属するテキスト間に異同がないのに対し、A 系統の場合はバリエーションが大きい。系統発生に関して一般的にいわれる原則によると、バリエーションが大きいものほどより古形に近いのであるが、A 系統と B 系統の通時的関係について議論する前に、シンドバード航海記の成立過程に関する従来の考え方をまとめておこう。

より古い形をとどめていると推定される A 系統についてゲルハルトは、9 世紀～10 世紀頃にバグダードあるいはバスラで一人の作者によってまとめられたとする (Gerhardt 1963: 236-263)。さらに B 系統については、A 系統をもとに 13～15 世紀頃エジプトで加筆された。同じくゲルハルトによれば、第六航海までは才能のある作者によって書かれたが、第七航海については文筆の才に乏しい別の作者によって書かれた⁶⁾。ゲルハルトの審美的な分析に対して、ガルサンはアラ

ビアンナイトに出てくる事件や人物、さらには物質文化について歴史文献を博捜して実証的に分析したが、シンドバード航海記がイブン・バットゥータの旅行記の影響を受けていると主張した (Garcin 2013: 259-280)。しかしながら、後で分析するようにシンドバード航海記にはイスラーム地理書の影響の方が大きく、イブン・バットゥータの旅行記から直接的に影響を受けたとする根拠は薄い。

3 シンドバード航海記の新たな系統

シンドバード航海記の系統には、前述した二系統には属さない、C系統とも呼ぶべきもう一つの系統があることを以下で見ていきたい。このC系統のあらすじはA系統に近い。C系統に属するテキストの一例として、国王の専属秘書兼トルコ語・アラビア語の通訳であったベティス・ド・ラ・クロワ (1653-1713)⁷⁾がフランス語に訳したシンドバード航海記がある。

3.1 ド・ラ・クロワの生涯と著作

ド・ラ・クロワは、国王のトルコ語・アラビア語通訳兼秘書であり著名な東洋学者でもあった父親のベティス・ド・ラ・クロワ (1622-1695)⁸⁾のもとで、幼少より東洋諸語はもちろんのこと、数学、占星学、地理学、美術、音楽などを学んだ。1670年には、父親から財務卿コルベールへの推挙で東方調査のために派遣されることになり、王の命を受けてトルコ、シリア、ペルシアに赴く。

1670年11月から1674年4月まではアレppoに滞在し、その間アラビア語、アラブ文学、トルコ語を学ぶと同時に、アラブ詩やアラブ音楽にも関心を持つ⁹⁾。この間に彼はルイ十四世ならびに彼が起こしたオランダとの戦争についてアラビア語で書くよう命じられる。この著作はオリエント諸国で広く読まれることになり、フランスの存在感を高めるという重要な役割を果たした。またアレppo滞在中には、王立図書館のために写本やメダルを購入している。

1674年4月、アレppoを離れたド・ラ・クロワはバグダードに向かい、そこで二か月滞在する。7月にバグダードからティグリス川を下り、バスラ経由でペルシアに向かう。8月にはイスファハーンに到着、二年間ペルシアに滞在しペルシア語を学ぶ。イスファハーンに滞在中、後に訳すことになるティムール伝の写

本を購入している。

1676 年、ド・ラ・クロワはイスファハーンを離れ、12 月からイスタンブール（当時のヨーロッパでは依然としてコンスタンティノーブルと呼ばれていた）に滞在し、数多くの翻訳をおこなった。イスタンブールではフランス大使のノワンテル公に仕えた。やがてノワンテル公はルイ十四世の不興をかってフランスに帰国したが、ド・ラ・クロワは王命によりさらに一年滞在している。

1680 年 12 月、フランスに帰国を許されたド・ラ・クロワは、1681 年にパリに到着した。ティムール伝のフランス語翻訳をコルベールに命じられるが¹⁰、コルベールはその完成を見ることなく 1683 年に亡くなっている。

1681 年、ド・ラ・クロワはフランスとモロッコの条約締結の際に条文の翻訳の任務に就いた。1682 年には通訳兼秘書官としてモロッコに派遣され、モロッコ王とフランス大使の間で通訳を務める。

1683 年、アブラハム・デュケーヌ、アンヌ・イラリオン・ド・コタンタン（トゥールヴィル伯爵）そしてシャルル・フランソワ・ダヴィ（アンフルヴィル侯爵）の随員として、戦争状態にあるアルジェに赴く。1684 年 4 月 25 日アルジェの太守とフランス王の条約締結のための交渉に出席する。

1685 年には、別の大使をフランスに連れて行く。夏にはチュニスとトリポリを訪れる。

1687 年はタンジェに赴いている。

1692 年 3 月 1 日、ド・ラ・クロワはコレージュ・ロワイヤルに二席あるアラビア語教授の一人となった。教職に就いた後は、パリを離れることなく数多くの翻訳をおこなっている。

1693 年 11 月 28 日、ド・ラ・クロワは Ibn Abī Zar‘ の *Rawḍ al-Qirās d’El Cartas, Histoire de Fès et de Maroc depuis 145 (762 de J.-C.) jusques à 726 (1326 de J.-C.)* の翻訳を完成させている。

1694 年、ド・ラ・クロワは自身の十年にわたるオリエント諸国での滞在記を執筆し、ポンシャルトラン伯爵に献上した。この滞在記は 1810 年に、ルイ＝マチュー・ラングレーによって出版されている¹¹。

1695 年 9 月 29 日、材木商の娘マリー＝ジャンヌ・ルシュウールと結婚。同年 11 月 4 日父親が亡くなっている。

1697年4月25日、*Relation abrégée de la ville et du royaume de Tripoly en Barbarie*の執筆を終え、ポンシャルトラン伯爵に献呈する¹²⁾。この頃、ティムール伝の翻訳を開始したとみられる。

1698年2月10日、息子のアレクサンドル＝ルイ＝マリが誕生。彼は1720年に父親の後を継いで王の秘書兼通訳となり、また1744年にはコレージュ・ロワイヤルのアラビア語教授となる。

1699年、ド・ラ・クロワはモロッコ大使アブダッラー・ベン・アーイシャのフランス滞在において通訳を務める。

1701年、シンドバード航海記の翻訳を終える。

1704年、トリポリの太守のフランス滞在において通訳を務める。

1705年3月26日、ド・ラ・クロワは1694年4月26日に着手したMustafâ Hadjî Khalfaの*Bibliothèque orientale*¹³⁾の翻訳を終える。

1707年12月26日、アルメニア語―ラテン語の辞書編纂に着手。息子のアレクサンドル＝ルイ＝マリによると、仕事上の都合でアルメニア語が必要になったため習得したという。ただ、この辞書の完成前にド・ラ・クロワは亡くなっている。

1707年、*L'Histoire de la sultane de Perse et des vizirs* を出版。

1708年、ルイ十四世がペルシアに派遣した特使ピエール＝ヴィクトール・ミシェルによって、ド・ラ・クロワがペルシア語に翻訳したルイ十四世の伝記がペルシア国王に献呈される。

1710年1月、ド・ラ・クロワがトルコ語から翻訳した二つの物語が、アントワーヌ・ガランによってその前年に出版された『千一夜物語』第8巻に挿入されていたことを知る。

1710年から1712年にかけて、ド・ラ・クロワは『千一日物語』を発表する。これは彼の作品の中で最も有名なものである。この物語集は、『千一夜物語』と同じように枠物語の構造を持っている。ド・ラ・クロワはこのことについて、当時流行していた『千一夜物語』を真似て執筆したと語っている。前書きにおいて彼は、Moclèsというイスファハーンの遊行僧が記した、インド伝来のペルシア語版から翻訳したと述べている。ド・ラ・クロワは1675年にMoclèsから写本を手に入れたとみられるが、その写本は見つかっていない。ガラン訳『千一夜物語』に比べるとド・ラ・クロワ訳『千一日物語』は忘れられた存在と言えるが、

この物語集に含まれる「カラフ王と中国の王女の物語」のみが、プッチーニのオペラ『トゥーランドット』の原作になったことで世界的に知られることになった。

1712 年 9 月 16 日、ド・ラ・クロワはルノー神父に、ポール・ミロマルがアルメニア語で書いた『キリスト教の真実』のフランス語訳を献呈する。

1713 年 12 月 4 日、ペティス・ド・ラ・クロワはパリで亡くなる。享年 60 歳。遺体はサン＝シュルピス教会に埋葬される。彼の死後 1722 年には、息子のアレクサンドル＝ルイ＝マリによって『ティムール伝』が出版されたが、彼の著作の多くは手稿のまま残されており、その中にはアラビア語、ペルシア語、アルメニア語、トルコ語の辞書や文法書などがある。特筆すべきこととして、アラビア語とフランス語の対訳形式で著された Mustafâ Hadji Khalifa（正確には Khalîfa）の *Bibliothèque orientale* は、非常に重要な書誌学的百科事典である¹⁴⁾。

3.2 ペティス・ド・ラ・クロワの『シンドバード航海記』

ペティス・ド・ラ・クロワによるシンドバード航海記のフランス語訳は、二種類の手稿が現存している。一つはミュンヘンにあるバイエルン州立図書館所蔵のものである (Cod. gall. 799) (Abdel-Halim 1964: 269–270)。タイトルは *Histoire Arabe De Sindabad Le Marin* となっており、「フランスのコレージュ・ロワイヤルのアラビア語教授、フランソワ・ペティス・ド・ラ・クロワ氏によって、1701 年にパリでフランス語に訳された。」と書かれている。全 294 頁（本文は 4 頁～293 頁）であり、前書きとして七つの旅に関する梗概がド・ラ・クロワ自身によって加えられている。このテキストについては、2016 年に校訂本が出版されている¹⁵⁾。もう一つは、アメリカのクリーブランド州立図書館所蔵のもの (Q 385.3A P445H) で、こちらは全 310 頁でアラビア語文とフランス語文の対訳になっており、アラビア語文については各々の単語に対して直接その下にラテン語による語釈が書かれている。さらに全体の巻末にアラビア語とラテン語の語彙集が付けられている¹⁶⁾ (写真 1)。このクリーブランド版のほうがミュンヘン版よりも充実した内容であると言える。

ミュンヘン版とクリーブランド版の詳細な比較は別稿にゆずるが、以下の三点をここでは指摘しておく。

①ミュンヘン版のほうが先に書かれており、これをもとにド・ラ・クロワ自身は

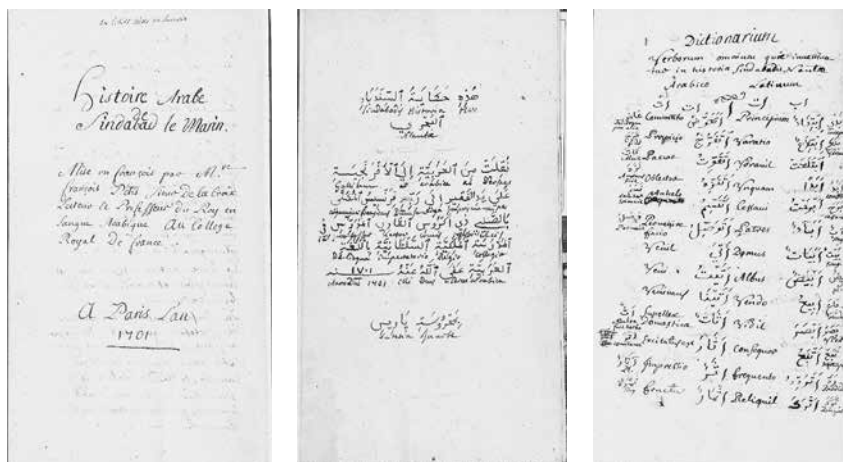


写真1 ペティス・ド・ラ・クロワによる『シンドバード航海記』写本（クリーブランド州立図書館所蔵）（Q 385.3A P445H）

出版を意図していたものと推定されるが、ガランが先にシンドバード航海記を出版したために、断念したのであろう。

②クリーブランド版については、ド・ラ・クロワの晩年になって息子のアレクサンドル＝ルイ＝マリが父の指導の下にフランス語版の改訂とアラビア語版の作成をおこなったと推定される。ミュンヘン版とクリーブランド版のスペルを比較するとかなり異なっており、クリーブランド版のほうがより現代フランス語のスペルに近いと言える。アラビア語版については、ド・ラ・クロワ自身がオリジナルのアラビア語写本を持っていたとも考えられるが、フランス語文から逆にアラビア語文にしたと推定される部分もあることから、ド・ラ・クロワの記憶をもとに息子が作成した可能性が高い。

③ガランもアラビアンナイトをコレージュ・ロワイヤルの教科書に使っていたらしいが、クリーブランド版についても同様の目的のために作成されたと考えられる。

以下ではミュンヘン版のテキストをもとに議論する。

まず写本の最後には、以下のように記されている。

「こうして海のシンドバードの物語の筆写は、Aoün（施し？）の家の助祭ファトハッラー（Fathallah）の息子である、卑しき下僕アスラン（Aslan）によって、西暦1672年6月17

日金曜日に完成された。」¹⁷⁾

ペティス・ド・ラ・クロワは 1672 年はアレppoに滞在しており、そこでアラビア語の写本を入手したと思われる。彼はアレppoの司祭からラテン語を介してアラビア語を学んでおり、そのためクリーブランド版のアラビア語文に付されたラテン語の語釈や巻末の語彙集についても、ド・ラ・クロワ自身の手によるものというよりは、アレppoでの学習経験をもとにしたものであったのかもしれない。実際にド・ラ・クロワはコレージュ・ロワイヤルの授業で『シンドバード航海記』を使用していたらしいが、購読本の体裁をとっているクリーブランド写本は、アラビア語の教則本として作成されたものであり、ミュンヘン写本のほうはその準備原稿だったとも推察される。

3.3 ド・ラ・クロワ版の特徴

ド・ラ・クロワ版については、その成立過程を考える上で重要な特徴がいくつかある。

①このテキストの中には「日本 (Japon)」という単語が登場している。

「私は、ペルシア湾から出航しました。この湾は、幅が 70 リューあり、たくさんの島があったのです。このペルシア湾は、ザンジバルや紅海に続いています。そこには大きな東方の海が広がっており、紅海からだとその東方の海の端にあるワクワク島までは 4500 リューの距離があるのです。その島は、日本の島々の方角にあります」(Nishio et Okamoto 2022: 8)。

この引用箇所に出てくる「70 リュー」や「4500 リュー」という数字に関しては、ガラン版、ラングレー版と同じである。しかし、ド・ラ・クロワ版のみ「日本」という地名が登場している。おそらく「ワクワク島」と「日本」が結びつけられた最初の例だと思われる¹⁸⁾。一方で、クリーブランド版のアラビア語本文には、「日本」にあたるアラビア語の単語は見当たらない。

②ド・ラ・クロワ版では、シンドバードが訪れた国や地方の文化や社会についてかなり詳細な民族誌的な記述が多く見られる。たとえばインドのカースト制度に関して次のように記述されている。

「たとえば、シャーキリーヤと呼ばれるセクトがあり、最も高貴な人びとで、王もその一員です。ほかのすべてのセクトはシャーキリーヤを崇敬しています。ただし彼らはほかのセクトをまったく崇敬していません。

ブラフマンと呼ばれるセクトの者たちは酒をまったく飲みません。シャーキリーヤの者たちは、食事の際に酒をそれも三杯飲みます。彼らは結婚はしませんが、ブラフマンは結婚します。

シューディーヤたちは、農耕に秀でています。また彼らは工芸の名人であり碩学です。そして、音楽と踊りの名人なのです。

ジャンマール・アッラシーヤはそのセクトの一つであり、遊興と学問に通じた人々です」(Nishio et Okamoto 2022: 12)。

A 系統に属するガラン版にはこのような詳細な記述はなく、B 系統に属するカルカッタ第二版では、「シャーキリーヤ」と「ブラフマン」に関する同様の記述はあるものの、ほかのものは触れられていない。

もう一つ別の例を挙げてみよう。

「インドの宗教は 42 のセクトに及び、あるものは創造者と預言者を認め、あるものは預言者を否定します。またあるものは両方を否定し拒絶するのです。

あるものたちは槍と矢筒の使い手で、車に乗るときも荷として結わえて積むほどに決して手放さないのです。

また呪術を使うのが上手い人たちもいます。これについては、学術書の中で述べられています。彼らが自慢げに言うには、呪術で雨や電を降らせることもできるとのことです」(Nishio et Okamoto 2022: 12-13)。

カルカッタ第二版では 72 となっている種姓(宗派)の数は、ここでは 42 である。これはイスラーム地理書(たとえば、イブン・ホルダーズベ『諸道と諸国の書』)の記述により近く、シンドバード航海記が成立するなかで参照したであろう情報源のオリジナルな記述からまだあまり変容していない段階にあるとも言える。③島の名前については多くが、ド・ラ・クロワ版に出てくるものは A 系統のものに近いが、そうでない場合もある。たとえば、反キリスト(偽キリストとも。アラビア語ではダッジャール)が住む島名は Cābīle となっており、これは B 系統のカルカッタ第二版に出てくる Kābil に近いが、A 系統のラングレー版に出てくる Kāsīl とは異なる。

①～③で挙げた特徴を考慮すると、ド・ラ・クロワ版は、従来の A 系統や B

系統ではなく、新たな C 系統として分類するのが適当であろう。

その証左となる典型的な特徴として、ここで C 系統として区別すべきド・ラ・クロワ版には入っているが B 系統には入っていない「ライオンの支話」がある。これは第七航海に出てくるエピソードで、ムアッジン（イスラームで礼拝の時間を告げる者）がライオンに食べられる話である。以下のようなあらすじになっている。

象牙によって多くの財産を得たシンドバードは、日没後ある町に立ち寄る。この町は日没後はすべての門を閉じ、誰も街に入ることができない。シンドバードは全財産を差し出すので開けるように懇願するが、町の間人たちはそれを拒む。夜になるとライオンが徘徊するため、掟を変えることができないと言うのだ。シンドバードは町の間人の助言に従って、門前のモスクに入って鍵を閉める。扉の内側に繫いだロバを食べようとしてライオンがやってくるが、モスクに入ることができずに夜が明ける。そこへムアッジンがやってきて、ライオンに食べられてしまうが、シンドバードは助かる。

このエピソードは第六航海までの話の流れとまったく雰囲気異なっている。第六航海までは、シンドバードは自らの知力を尽くして困難に立ち向かい克服していった。ところが、ここでは彼は特に何もせず偶然にも助かっている。その意味で、シンドバード航海記の全体に通底しているはずのライトモチーフからは逸脱した物語展開となっている。もし「ライオンの支話」が入ったテキストのほうがより古いと仮定したならば、ムアッジンがモスクでライオンに食べられるという場面は、イスラームの教えにとっては不都合であり、イスラーム色の強い編集では省略された可能性がある。

このエピソードはおそらく上記のような理由からか、ガランが所有していた写本 (Arabe 3646) を含めて A 系統の写本の多くに挿入されているが、ガラン版（さらにガラン版をもとに編集されたアラビア語版のラングレー版）では省略されている。またこれも前述したように、B 系統における第七航海は A 系統とはまったく異なっており、それまでの六つの航海の物語やエピソードを再編集するような部分も含めて同じテーマあるいはライトモチーフに合うように加筆されて

いるが、ここで問題となっているライオンのエピソードは出てこない。このエピソードがガラン版やカルカット第二版などの標準的なテキスト伝承の中には登場しないので、シンドバード航海記の本来的なエピソードであったかどうかについては判断することが難しい。ただし後述するように、ガラン所有の写本（Arabe 3646）などを含めて、キリスト教徒が伝承（あるいは筆写）した可能性が高い写本のほとんどには、この話が挿入されていることは興味深い。

4 ド・ラ・クロワ版とシンドバード航海記の成立過程

カザノヴァは1922年の論考のなかで、当時フランスの国立図書館が所蔵していた八つのシンドバード航海記写本を紹介している。しかしながら、ゴータ図書館、大英図書館、ケンブリッジ図書館、イエール大学図書館などの所蔵写本に関する、筆者による最新の調査によると（Nishio et Okamoto 2021: 47）、その三倍の数の写本が存在していることが判明している。

特筆すべきこととしては、シリア文字を使ってアラビア語を書くガルシューニーと呼ばれる六つの写本が最近になって発見あるいは再発見されたことである（写真2）。

これらの写本はキリスト教徒のあいだで伝承されていたもので、おおよその年

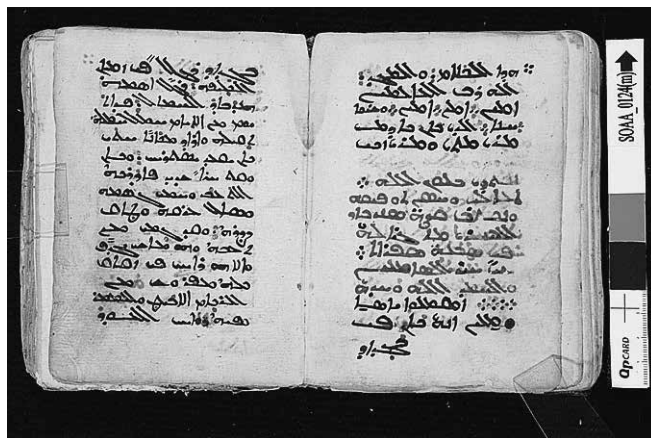


写真2 アレppoのシリア正教会所蔵 ガルシューニーによるシンドバード航海記写本（SOAA 124 M fols. 85v.–86r.）

代としては 16～18 世紀に筆写されたと推定される。内容についてはド・ラ・クロワ版に近く、C 系統に属する。ガルシューニー写本を比較分析することで、アラビアンナイトとシンドバード航海記の関係をめぐる謎を解き明かせるだろう。

通常はアラビアンナイトには含まれることがない A 系統の物語を含むアラビアンナイト写本の存在や、逆に通常はアラビアンナイトに含まれている B 系統の物語のなかの第七航海の部分のみが（夜番号を付されることなく）独立した物語として記されている写本¹⁹⁾の存在、主人公のシンドバードが「漁師のシンドバード」としてまったく異なった物語の主人公の名前になっている写本²⁰⁾の存在などについては、これまでの研究では等閑視されてきた。これらの異本群を総合的に分析することで、シンドバード航海記の成立過程を解明できるにちがいない。

シンドバード航海記の成立過程とアラビアンナイトとの関係をめぐる謎を解くには、すべての写本を詳細に比較検討することが必要であるが、ここでは第六航海の終わりから第七航海全体に至るエピソードの展開を比較することで、シンドバード航海記の祖形を再構するための手がかりとしたい。

第六航海の終わりで、シンドバードは筏に乗ってある国にたどり着き、王の前に連れていかれる。この場面について、A 系統と B 系統の代表例である、それぞれガラン版とカルカッタ第二版で比べてみよう。ガラン版では、シンドバードがたどり着いた国の名前が明記されているが、カルカッタ第二版には国名はない。シンドバードが筏に積んでいた宝石類を王に献上する場面については、ガラン版では王はそれを受け取らず、カルカッタ第二版では受け取っている。また、ガラン版ではシンドバードが国内を観察して回る場面があるが、カルカッタ第二版にはこの場面はない。さらに、シンドバードが王からカリフへの手紙と贈り物を受け取る場面については、ガラン版ではその内容が詳しく説明されているが、カルカッタ第二版には説明がない。

両者を比べると、カルカッタ第二版はガラン版より簡略化されていることがわかる。わかりやすいように、両者の違いを図にまとめておく（図 1）。

次にド・ラ・クロワ版や、ガルシューニーで書かれた四つの写本つまりアレppo・シリア正教会所蔵写本（SOAA と略記）²¹⁾、バーミンガム大学ミンガナコレクション所蔵写本²²⁾、トルコのマルティン教会（Église de Quarante martyrs）所蔵写本（CFMM と略記）²³⁾、ゴータ図書館所蔵写本²⁴⁾について見てみよう。これら

第六航海の最後のシーン	
筏が岸辺につき目が覚めると黒人(インド人)たちに助けられる	
ガラン版	カルカッタ第二版
国王に会う(国名あり)	国王に会う(国名なし)
国王に筏の宝を進呈するが受け取らず	国王に筏の宝を進呈し受け取る
王国内の観察	
帰国を決心	
カリフへの手紙と贈り物(両者に内容説明あり)	カリフへ贈り物をもって帰る(内容説明なし)
帰国のシーン	
カリフに国王の説明	カリフに身の上の説明

図1 第六航海の最後のシーンの比較(筆者作成)

のうちの SOAA と CFMM の二つは、最近になって発見されたものである。これらはすべて C 系統に属しており 16 世紀の終わりか 17 世紀の初めごろに筆写されたものと推定される。ライオンの支話と、カリフへの手紙と贈り物についての説明の有無に注目すると、図に示したようにかなりバリエーションがあることがわかる(図2)。

以上のような比較分析から、まず一つの疑問が浮かびあがる。第七航海はもともシンドバード航海記に入っていた物語なのだろうか?すでに述べたように、第七航海のエピソードは第六航海までのエピソードとまったく異なる雰囲気を持っている。したがって一つの仮説であるが、成立当初は第七航海の部分は存在せず、シンドバード航海記はシンドバードが自分の家に帰ったところで終わっていたのかもしれない。

そこに第七航海の部分を加えるには、再びシンドバードが旅に出かけるように第六航海の終わりを変える必要があったと思われる。SOAA 写本にはシンドバー

ガラン版	SOAA・Mingana	De La Croix・CFMM・Gotha
国王に会う(国名あり)	国王に会う(国名あり)	国王に会う(国名あり)
国王に筏の宝を進呈するが受け取らず	国王に筏の宝を進呈するが受け取らず	国王に筏の宝を進呈するが受け取らず
王国内の観察	王国内の観察	王国内の観察
帰国を決心	帰国を決心	帰国を決心
カリフへの手紙と贈り物(両者に内容説明あり)	カリフへの手紙と贈り物(両者に内容説明あり)	カリフへの手紙と贈り物(両者の説明なし)
帰国のシーン		帰国のシーン
		カリフへの手紙の説明
カリフに国王の説明	カリフに国王の説明	カリフに国王の説明
↓	↓	↓
第七航海にライオンなし	第七航海にライオンあり	第七航海にライオンあり

図 2 第六航海の最後のシーンとライオンの支話の比較 (筆者作成)

ドの帰還の場面がないが、もし第六航海の後に別の物語が続くのであれば、この場面は必要性がなくなり、削除されたのではないかと考えられる。この仮説に従うと、第六航海の終わりは第七航海の準備のような役割を持ち、物語展開が不自然にならないように各写本の筆写者なり作成者の手によって改変あるいは編集された結果、図で示したような違いが生まれたと推測される。

それでは、ライオンの支話についてももう少し詳しく考察を加えてみよう。この支話あるいはエピソード自体は、第七航海の物語が形成される過程で新たに挿入されたものだろうか？あるいは、第七航海を含んでいる物語集にもともと入っていたものなのだろうか？この問いに答えるための手がかりとなるのは、このライオンの支話がほとんどの場合、キリスト教徒が伝承したり保持したりしていた写本であるという事実である。言い換えれば、ライオンの支話が入っている C 系統に属する写本は、キリスト教徒によるテキスト伝承であるとみなせるだろう。ただし、ガラン版のような標準化されたテキスト伝承と考えられる A 系統の場合には、このライオンの支話は確認されていない。このことをどう考えればいいだろう？少なくともガラン版について言えば、ガランは彼が訳したシンドバード航海記以外のアラビアンナイトの部分についても必ずしも底本であったアラビア

語写本に完全に忠実ではなく、しばしばテキストを改変あるいは編集しており、ガラン版シンドバード航海記の場合も、「アラブ的」かつ「イスラーム的」なテーマに沿って語られる物語集として再構成するために不都合だと判断したライオンの支話を削除した可能性が高い。さらにこの考えを突き詰めれば、そのような A 系統をもとに大幅な改変をした標準的なテキスト伝承としての B 系統においては、ライオンの支話が入る余地はなかったのである。

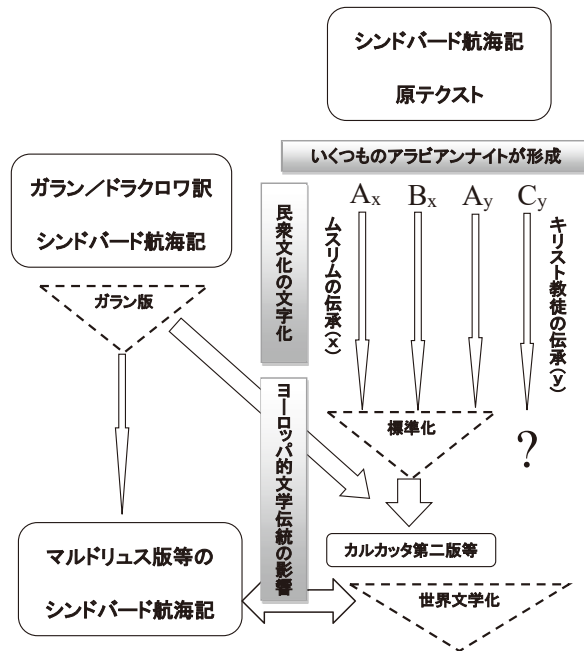
ガランはキリスト教徒によって伝えられたテキストを底本として翻訳し、物語に新たな形を与えたと言える。一方で、ド・ラ・クロワはキリスト教徒のあいだで伝えられていた物語伝承を、原典テキストに沿って忠実に翻訳していると言え、このことはド・ラ・クロワの翻訳全般についてあてはまる特徴でもある。またド・ラ・クロワ訳シンドバード航海記についてさらに付け加えて言うならば、文中に具体的かつ実用的に価値の高い多くの地理情報が改変されることなく含まれていることを考慮すると、口承というよりは書承の方に重きをなしてテキストが伝承されてきたことが明らかである。この傾向がシンドバード航海記の祖形から受け継がれてきたものだとするならば、おそらくこの物語はもともとは地理的あるいは地誌的な情報の記録という実用的性格を有していたものであって、現代的な意味での空想上の物語という性格は当初はあまり持ち合わせていなかったのではないだろうか。シンドバード航海記が異世界のファンタジーとなったのは、文字による文学伝統の中に組み込まれることで実用書としての性格を徐々に失っていき、さらには特定の地域の人びとが享受する民衆文学を構成するものとなっていく過程での出来事だったのではないだろうか。

シンドバード航海記の成立過程の問題については、様々な写本を比較分析した結果から、この物語はアラビアンナイトにはもともと入っていなかったと考えるのが妥当だろう。各写本に見られる特徴的なエピソードの構成とその分布をもとに、シンドバード航海記の成立過程を分析すると、当初のシンドバード航海記は、船乗りが携帯する実用書のような性格を持っていたと推定される。その後、A～C 系統に属する様々なシンドバード航海記が誕生したのであるが、A 系統と B 系統の場合はアラブ・イスラーム世界全体に広まり、標準的なテキスト伝承として印刷版にもなった一方、C 系統の場合はキリスト教徒のあいだでの伝承にとどまっていたのではないかと推察される。ド・ラ・クロワが翻訳に依拠した

テキストは、キリスト教徒のあいだで伝承されてきたものの一つであり、比較的閉じたサークルの中で受け継がれてきた結果として、筆写者なり編集者の物語作者としての意図が多分に反映されて、各テキスト間に少なからぬ異同が生まれたのではないだろうか。一方でガラン版は、アラブ世界あるいはイスラーム文化を紹介するという意図を持ちながらもヨーロッパの嗜好に合うように編集されていたため、標準的なテキストと成りえたのである（図3）。

前述したように、ド・ラ・クロワ版のテキスト本文にはイスラーム地理書の情報が比較的そのまま採用されている。船乗りたちが口頭で伝えてきた物語にはこうした実用的な描写がもともと存在していたが、都市部の新たな知識階層としての中流層の人びとのあいだに流布し²⁵⁾、その次の段階ではシンドバード航海記と類似の文学ジャンルとして形成されていたアラビアンナイトに取り入れられたという仮説が成り立つ。

いつシンドバード航海記がアラビアンナイトに取り入れられたかについては、



(注: A=A版、B=B版、C=ABと異なる版)

図3 シンドバード航海記の形成過程に関する仮説(筆者作成)

現時点では判明していないが、B系統の物語については、ブーラク版アラビアンナイトの成立とともに標準的なテキスト伝承の一部となったことは明らかである。また、特にキリスト教徒のあいだでも伝わっていたことを考えると、シンドバード航海記のもともとの物語が必ずしもアラブ的かつイスラーム的な主題や背景を持っていたとは言えず、さらには典型的な民衆文学（フォークロア）であったとも言い難い。同じことがアラビアンナイトにも言えるかもしれない。このような観点から、シンドバード航海記だけでなくアラビアンナイト自体についても再考する必要がある²⁶⁾。

今日に至るまで、アラビアンナイトに関する研究は、アントワヌ・ガラン、エドワード・レイン、リチャード・バートン、そして日本におけるアラビアンナイト研究の草分けである前嶋信次によるものも含め、「千一夜分が揃った完全なアラビアンナイト（千一夜物語）の探求」、あるいは「通常の歴史書の類からは知ることができないアラブ世界の庶民の宗教実践や世界観、社会生活を知る」という目的でおこなわれていた。しかし、彼らが資料として依拠したアラビアンナイトの標準版テキスト出現の過程は非常に複雑である。アラビアンナイトが通常の意味での民衆文学であるという視点についても再考する必要があるだけでなく、その当然の帰結として標準版テキストだけでなく、これまでにほとんど分析対象となつてこなかった非標準的なテキストについても分析する必要がある。アラビアンナイト研究をより深めるためには、ド・ラ・クロワ版のような非標準的なテキスト伝承に属する写本についても研究することが不可欠なのである。

5 本文訳ならびに注釈

アラブの物語 海の²⁷⁾ シンドバード²⁸⁾

フランス・コレージュ・ロワイヤル²⁹⁾ (パリ), アラビア語教授³⁰⁾ フランソワ・ベティス・ド・ラ・クロワによるフランス語訳。1701年。

はしがき³¹⁾

海のシンドバードの七つの旅は、アラブ全域とトルコにおいて大変よく知られ

ている。これらが実話であり、そこで繰り広げられる冒険は作り話ではないと言
い張る人たちがいる。

しかし識者によると、もとをただせば実話だとしても、類い稀で心躍るもの
にするために、まったくの事実無根の話や、事実を脚色した話もあるという。

本書には七つの旅が入っており、それぞれが世にも奇異なものばかりである。

前書きには、一人の荷担ぎ屋の身の上で起こった出来事が描かれている。彼は
疲労困憊し、生きる望みを失いかけていたが、シンドバードの饗宴の間に連れて
行かれて、思いがけず楽しい時を過ごす。荷担ぎ屋はシンドバードから施しを受
け、心も満たされた。そこでは、シンドバードが七つの旅を語る。

最初の旅では、緑豊かな素敵な島に、シンドバードと船に乗っていた全員が上
陸し、鍋を火にかける。実はその島は鯨であり、熱さのあまり鯨は海へ潜って
いった。シンドバードは泳いで、ミフラージュ³²⁾と呼ばれる王の治める島に到
着する。のちにシンドバードは、自分が乗ってきた船と再び出あい、故郷に帰る。

第二の旅では、シンドバードがある島に降り立つ。シンドバードは眠り込んで
しまい、船は彼を待たずに出航してしまう。彼は丸屋根を見つけ、そこに行って
みるが、それはルフ³³⁾鳥の卵だった。そこに鳥がやってきて、彼がその爪に自
らを括り付けると、鳥は彼を連れ去り、ダイヤモンドの谷の断崖に運ぶ。そこか
ら、次は大鷲が彼を陸地へと連れて行った。シンドバードはダイヤモンド商人に
出合い、彼らとともに帰還する。

第三の旅では、シンドバードは人間よりも大きいサルがいる島に上陸する。サ
ルの王はシンドバードの仲間のほとんどを食べてしまう。サルの王の眼を潰した
後、シンドバードは筏に乗って逃れる。しかし、無事に逃れたはずが、ハファシ
アン³⁴⁾という蛇がいる島に入り込む。シンドバードは通りがかりの船に助けら
れる。

第四の旅では、人喰いの黒人が登場する。この黒人たちは、人間をある草で太
らせてから食べてしまう。胡椒の商人たちがそこからシンドバードを救い出し、
彼らの島へ連れて行く。シンドバードは、彼らに馬の鞍の作り方を教える。その
返礼として、彼らはシンドバードを結婚させる。しかし、妻は死んでしまい、彼
らはシンドバードを妻といっしょに埋葬する。シンドバードは地下から逃げ出
し、偶然通りかかった船で出航する。

第五の旅では、シンドバードはある老人に出会う。老人はシンドバードの肩に乗り、そのままの格好で長いあいだ自分を担がせる。彼は老人を酔わせ、追い払うことに成功する。次に彼はある島に行く。そこでは住人たちがサルに怯え、海の上で眠っている。シンドバードはナツメグを採りに行くことになるが、石をサルに投げつけてナツメグを得ることができた。

第六の航海では、シンドバードは迷宮で遭難し、彼の仲間は皆飢え死にしてしまう。しかし、水源を見つけたシンドバードは、筏を作り、水の流れに従って岩や山の下を進んでいく。彼は眠り込んでしまい、ふと目覚めるとセイロン島³⁵⁾にいた。その島の王はシンドバードを歓迎し、カリフへの手紙を託す。

第七の航海では、セイロンの王から手紙と贈り物を受け取ったカリフのハールーン・アッラシードが、シンドバードを返礼のために派遣する。シンドバードが乗る船が沈没し、彼はある島にたどり着く。その島の人たちは象の骨を集めていた。シンドバードが象の墓を見つけ、それをきっかけに帰国することになる。航海に出たシンドバードは、危うくライオンに食べられそうになる。

著者の前書き

ここに、かの有名なシンドバードの物語を記す。海をめぐる七つの旅での冒険は、世にも奇異な物語である。バグダードのカリフ、ハールーン・アッラシード³⁶⁾の御代でのこと、シンドバード³⁷⁾という名の荷担ぎ屋がいた。ある日、彼は強い日差しの中たいそう重い荷物を背負い、遠くまで運ぼうとしていた。焼けつくような暑さで、汗が体中に流れ、彼は疲れ切っていた。

このみじめな姿で彼は言葉を吐きだした。「ずっとそよ風に吹かれながら、涼しくて心地よい通りを歩きたいものだ。地面には薔薇水が撒かれた上に、沈香³⁸⁾と竜涎香³⁹⁾の香りにつつまれたいものだ。」

彼は独りでこんな思いにふけていた。疲れて頭がくらくらしてきて、彼は荷物を投げ出し、一息ついて気を取り直すために座った。突然、上の方からキジバト⁴⁰⁾やナイチンゲール⁴¹⁾の鳴き声、それからハーブ⁴²⁾、ヴァイオリン⁴³⁾、オーボエ⁴⁴⁾の楽の音が聞こえてきて、彼は周りを見回した。素晴らしい香りにつつまれ、そして美味しそうな煮込み料理の良い匂いが漂ってきた。見ると、召使いたちが出入りしていた。顔色や体つきからは、良いものをたくさん食べているよ

うだった。彼らは素晴らしい金色の服を身に纏っていた。ヒンドバードは目を満足させ心を満たすことができるすべてのものを、そこに見出したのである。

彼は疲労困憊し、空を見上げてこう言い放った。「おお、万物の創造主よ！私に落ち度があるのに、御心に潔しとしないことをお赦してください。なぜあなたは、沢山の食べ物や美味しい飲み物をあの者たちに与えるのですか？…私がオオムギのパンすら十分に食べられないというのに。彼らの主人は働く苦勞も知らず、娯楽に遊興、そして音曲に耽り楽しい時を過ごしているではないですか。」

そして、彼は口を噤み、嗚咽を漏らした。そして再び口を開いて、自分の不幸を嘆き、こう言った。

「おお、なんと私は不幸なのだろう！私は体を休めてゆっくりと食事もできず、そしてやっとのことでそら豆の酢漬⁴⁵⁾にありつくというのに、あちらは疲れなど知らず、私のように荷物を担ぐことも一生なく、安逸な日々を送っているのだ。

手を打ち鳴らし、気ままに楽しくくらすことのみが彼の関心事なのだ。私は日々の暮らしにすら不自由しているのに、彼は宴会三昧で美酒に酔いしれている。私はあなた様に不満を申し上げざるを得ません。『おお！公明正大なる神よ！よき裁き手となり、どうぞ私に嘉してください。』」

彼の言葉が終わるか終わらないかのうちに、一人の召使⁴⁶⁾が家から出てきた。そして彼の手を取り言った。「私とともに来てください。主人があなたをお呼びです。」彼には断る理由もなかったので、召使といっしょに部屋に入り、門番に荷物を持たせた。

部屋の扉まで来ると、高貴な人びとが集まっているのが目に入った。彼らはおもいおもいに楽しんでいて。部屋の真ん中に整えられたテーブルがあり、果物、良い香りの食べ物や⁴⁷⁾、その他さまざまな料理と飲み物が並んでいた。そして部屋の端には楽師たちがいて、あらゆる種類の楽器を奏でていた⁴⁸⁾。また、美しい女性歌手たちもいた。その姿はまるで地平線に浮かぶ満月のようだった。

部屋の上座に一人の男がいた。髭は白くなり始めていたが、品のある立派な顔立ちに堂々とした風体で、素晴らしい身なりをしていた。

ヒンドバードはあっけにとられていた。しばらく眼前の華やかさに驚いていたがふと我に返り、かしこまって挨拶をした。一座の皆からは、オリエントのしきたりに従って挨拶が返された。

その集まりの中にいた主人が、丁重に彼を迎え入れた。彼は自分の近くに来るように言って、すぐそばに座らせた。そして、飲み物と食べ物を彼の手ずからすすめた。ヒンドバードは気を取り直し、不安や驚きも感じなくなってきた。主人はこんな風に話しかけた。

「お名前は何とおっしゃいますか、わが兄弟よ。」

「荷担ぎヒンドバードと申します。」と彼は答えた。

「お会いできてうれしいです。」と主人は言った。「ところで、先ほど道で仰っていたことをもう一度私たちに聞かせてくれませんか。」

ヒンドバードは恥ずかしくなり恐縮して地面にひれ伏し、そして言った。「旦那様、疲れや貧しさのあまり、人はしばしば礼を失するものです。私は疲れのあまり気持ちががかり乱されていました。私の口から出た言葉は不謹慎そのものでした。」

主人は答えた。「あなたには落ち度はありませんよ。何も悪いことはしていません。どうか聞かせてください。」

ヒンドバードは言った。「何も言っておりません。」

主人は言った。「おお、ヒンドバード！話してくださいよ！私は海のシンドバードと申します。今の私は安逸に過ごしているようにあなたには見えるかもしれないが、苦難や苦痛を重ねた末に手にしたものなのです。私が味わった不幸は、この世でいちばん大きいものでした。私はもっとも辛く厳しい不運にも耐えてきたのですよ。恐れ知らずな人間でさえ私の物語には震え上がって驚愕するでしょう。」

「皆さん聞いてください」と彼は言った。「七つの旅の中で私に起こったことは、聞く者すべてを驚かせるものです。驚異に満ちた出来事に遭遇し、海と陸の道行きは困難を極めたのです。これらの話は聞く者を恐怖に慄かせることでしょう。」

彼は召使いに命じて、ヒンドバードの荷物を目的地まで運ばせた。それから、海のシンドバードはこんなふう冒険談を始めたのである。

第一の旅の話

さてみなさん、私はたくさんの遺産を得て裕福になり、名声も得ました。でも、それを湯水のように使って贅沢な生活をし、仲間と遊び暮らしていたのです。贅沢な暮らしに酔いしれた自分の愚かさに気づき、我に返ったときには、す

でに財産を使い果たし、^{にっち}二進も^{さっち}三進も行かなくなっていたのです。

私は目が覚め、ひどく狼狽してしまいました。私は金目のものや、隠し財産を数え上げてみました。しかし、手元の金品は減る一方で、今までのような暮らしはできないことがわかりました。私はこの状況をよく考え、後のことが怖くなりました。そして知恵の書に記されている預言者ソロモンの言葉を思い出したのです。それによると、ほかのものと比べたときに価値がわかるものが三つあります⁴⁹⁾。

「第一に、死ぬ日は生まれた日より価値がある。

第二に、生きている犬⁵⁰⁾は死んだライオンより価値がある。

第三に、墓は貧困よりも価値がある。」

そういうわけで私は、財産が底をついたあとに手元に残ったわずかばかりの家具や衣類その他を急いでかき集めました。私はそれらを市場に持って行き、上手く高値で売りました。全部で銀貨三千ディルハムになり、商人たちの旅の一行に加わったのです。

私はその中の信用のおける仲間の勧めに従って商品を買求めました。私は手元にあるいくばくかのお金で、これからどうやって生きていくか逡巡し、決心が揺るぎそうになりましたが、旅への想いは一層強くなり、最後には心を決めたのです。

ある格言が思い浮かびました。「夜を徹して励めば名声高まり、而して安眠を得る。」

こんな格言もあります。「高価な真珠を求めるなら海に潜れ。出世を望むならば、若くして労を厭わず難事に敢えて立ち向かうべし。」⁵¹⁾

こうして私は船荷としてふさわしい品々を買ひ、自ら進んで大きな儲けになる商いに身を投じることにしたのです。かくして、私は美しいバスラの町に着きました。

私は⁵²⁾、ペルシア湾⁵³⁾ [*Bahr Almasālik⁵⁴⁾ と呼ばれる] から出航しました。この湾は、幅が⁵⁵⁾ 70 リューあり、たくさんの島があったのです。このペルシア湾は、ザンジバル⁵⁶⁾ や紅海⁵⁷⁾ に続いています。そこには大きな東方の海⁵⁸⁾ が広がっており、紅海からだとその東方の海の端にあるワクワク島⁵⁹⁾ までは 4500 リューの距離があるのです。その島は、日本⁶⁰⁾ の島々の方角にあります。

この海では、竜涎香⁶¹ や丸くて大きな⁶² 真珠が採れます⁶³。その海岸に沿ってザンジバルとアビシニア⁶⁴ の地があります。

海のシンドバードは次のように言った—私たちは出航し、何日かの船旅の後、少し体調が悪くなりましたが、直に良くなりました。

島から島へと航海をつづけながら品物を売ったり買ったり、ときに品物と交換したりして、かなりの距離を進んだある日、広々とした島が私たちの目の前に現れました。そこはまるで緑あふれる庭園のようで、花々は極彩色の織物のようでした。

水先案内人⁶⁵ は船を寄せるために帆を向けました。そしてそこにたどり着くと、錨を下ろして上陸し、草むらの上で皆で寝そべりました。火を起こして鍋で料理をするものもいました。洗濯⁶⁶ をするものもいました。また豊かな緑に見とれながら、気分良く飲み食いしているものもいました。

しかし、船にいた人たちがそんなことをしているうちに突然、島の一方が高くなったかと思うとまた一方が低くなり、地面が大きく揺れたのです。

水先案内人が力の限り叫ぶのが聞こえました。「みなさん！船が沈んでしまう。船を出すから急いで戻ってくれ。」

商人たちは驚いて一步も動けませんでした。足下の島は、ほかならぬクジラ[*Alhhaout]⁶⁷ と呼ばれる海の魚だったのです。

だれもが船に必死で乗り込もうとしました。しかし、何人かは遅れてしまい、島はもろとも海に潜りはじめました。彼らは洗濯用の木片⁶⁸ の上にどうにかとどまっていました。

私もその中にいました。そして、人というものが持つ生への執着から、自分の木片をつかみ、うまい具合にその上に体を乗せました。

そして、水面を足で強く蹴って船の方に進もうとしました。しかし、私の体は波に翻弄され、海は唸り声を上げながら波を一層高くし、そのうねりは天にも届きそうでした。私にはもう船がどこにあるのかわからなくなってしまったのです。

海は激しく荒れていました。嵐が起こって私の体を右へ左へと持っていくので、とても厳しく体力を消耗しました。そのままずっと私は波に弄ばれながらも、足で波に逆らい進みました。その日の昼も夜もずっとこのような有様でした。

朝が来ると、私はやつれ果てまるで骨と皮のようになりました。ほとんど死にそうになっていた私に、突然激しい風が吹き付け、ある島の海岸まで運ばれたのです。

とっさに私は植物の根っこにつかまりました。そして海岸にたどり着き、島に上陸しました。そこで人心地ついたのですが、私は生きているというよりは死人のようでした。何しろ両足の肉まで魚にかじられていたのです。

それから日が高くなるまで、私は死人のように地面に身を投げ出したままでいました。そして這いつくばって時には足を時には手を使い、また転んでは起き上がり、やっとの思いで歩みを進めながら、この島で食べることができる植物を探したのです。

私はしばらくのあいだこのようにして、果物や野菜といった食べ物をなんとか手に入れ、死ぬかと思うほどの空腹を満たすことができました。また、真水もあったので、それで渴きをいやしたのです。

私はこうして次の晩を過ごしました。そして翌日には気力が戻り、体力も取り戻しました。私は生き延びるために必要なものを得ると、島をうろうろと見回っていましたが、そのうち木々が茂る場所から離れていったのです。そして、海の方に目をやると、何か動物らしきものがあるのに気が付きました。私は、気が狂ったように近づいていきました。その動物は雌馬で、そこに繋がっていたのです。私が近寄ると、地下の方から私を呼ぶ男の声が聞こえました。

私がそちらの方を向くと、その男は私に言いました。「お前は何者だ？」私は答えました。「船で遭難した者です。」

彼は私の方に近づき、そして手を取って地下の洞窟へと招き入れました。それから私を座らせると、食べ物を出しました。私はそれを食べ、すっかり元気を取り戻しました。そして、これまでのいきさつについて尋ねられたので、私は自分の身の上に起こったことを話しました。彼はその話にたいそう驚いていました。

彼は私に言いました。「私たちは、王の馬小屋で働く者⁶⁹⁾です。王はこの島を治めており、ミフラージュ王⁷⁰⁾と呼ばれています。私たちは毎年この季節にこの海岸にやってきます。牧場から雌馬を連れてきて、ここに繋いでおくのです。そしてこの場所に隠れているのです。そうすると、海から雄馬がやってきて、雌馬の上に乗るのです。雄馬はそこから降りるや否や雌馬を殺そうとします。しか

し、私たちが叫び声をあげると、雄馬は海に戻っていくのです。

そして私たちは雌馬を連れていき、出産の時期まで世話をします。雌馬が仔馬を産んだら、大きくなるまで育てます。この仔馬を、私たちは海馬⁷¹⁾と呼んでいます。ちなみに、今日は私たちがここで過ごす最後の日だったのです。

もしあなたが今この時ここにたどり着いていなかったら、私たちはここを去っていて、あなたはこの場で死んでしまっていたでしょう。ここはかなり人里離れたところなのですから。」

私たちがこのように話をしているあいだに、ふと見ると海から一頭の雄馬が出てきて、繋かれた雌馬の上に乗りました。雄馬がそこから降りると、そこにいた一人が大声をあげ、その雄馬は海へと戻っていったのです。

先ほどと同じ人が、もう一度大声で叫びました。するとそこに詰めていたたくさんの人たちが、それぞれ一頭ずつ雌馬を連れて彼の周りに集まりました。彼らは帰路に就くために馬に乗り、私についてくるように言いました。そして、私たちはともにミフラージュ王の町に着いたのです。王は私を招き入れ、取り巻きのあいだに座らせてから、これまでのいきさつについて私に尋ねました。

私は、自分の身に起きたすべてのことを王に話しました。すると王は、私が大変な災難に遭いながらも無事切り抜けてきたことに驚いていました。そして、毎日王のもとに出向きいくばくかの金銭⁷²⁾を下賜され、必要に応じてそれを使えるようにしました。こうして私は船が立ち寄るところに通っては、何か新しい知らせがないかと尋ねて回ったのです。

私は、商人たちのあいだをバグダードについて何か知っていないか聞いて回りました。というのも、そういう人がいれば、その伝手で国に戻れるのではないかと思ったからです。

それから私は王に再び謁見しました。そして王と言葉を交わす機会に恵まれました。王はたいそうご満悦だったと自負しております。

この王に加えて、インドの学者⁷³⁾やラジャ⁷⁴⁾たちとも会談しました。彼らは私の故郷についての話を所望しました。そして彼らは自分たちのこと⁷⁵⁾、特にインドの様々なセクト⁷⁶⁾について話をしました。たとえば、シャーキリーヤ⁷⁷⁾と呼ばれるセクトがあり、最も高貴な人びとで、王もその一員です。ほかのすべてのセクトはシャーキリーヤを崇敬しています。ただし彼らはほかのセクトをまっ

たく崇敬していません⁷⁸⁾。

ブラフマン⁷⁹⁾ と呼ばれるセクトの者たちは酒をまったく飲みません。シャーキリーヤの者たちは、食事の際に⁸⁰⁾ 酒をそれも三杯飲みます。彼らは結婚はしませんが、ブラフマンは結婚します。

シューディーヤ⁸¹⁾ たちは、農耕に秀でています。また彼らは工芸の名人であり碩学です。そして、音楽と踊りの名人なのです。

ジャンマール・アッラシーヤ⁸²⁾ はそのセクトの一つであり、遊興と学問に通じた人たちです。

インドの宗教は 42⁸³⁾ のセクト⁸⁴⁾ に及び、あるものは創造者⁸⁵⁾ と預言者⁸⁶⁾ を認め、あるものは預言者を否定します。またあるものは両方を否定し拒絶するのです⁸⁷⁾。

あるものたちは槍と矢筒⁸⁸⁾ の使い手で、車に乗るときも荷として結わえて積むほどに決して手放さないのです⁸⁹⁾。

また呪術⁹⁰⁾ [*Nadgyayl] を使うのが上手い人たちもいます。これについては、学術書の中で述べられています。彼らが自慢げに言うには、呪術で雨や雹を降らせることもできるとのことです。

私は、カービール⁹¹⁾ という島に行きました。そこでは一晩中タンバリン⁹²⁾ や太鼓⁹³⁾ の音が聞こえ、海に暮らす者たちが言うには、そこには反キリスト⁹⁴⁾ がいるそうです。

海で見た魚の中には、体長が 100 から 200 プラス⁹⁵⁾ のものがありました。船乗りたちはその魚を恐れ、板を叩いて海の底へと追いやるのです。

また、モリフクロウ⁹⁶⁾ のような顔をした 1 クデの長さの魚を見ました。

王は⁹⁷⁾、すべての町に大きな庭園を所有し、家畜小屋にしています。小屋には、魔法にかけられた鶏⁹⁸⁾ やキジ [*魔法の雌鶏]⁹⁹⁾ がいて、一日あたり 50 ルイ¹⁰⁰⁾ を超える黄金をもたらしめています。というのも王は、キュイッス¹⁰¹⁾ [**雄鶏の勝気なものの種類]¹⁰²⁾ という種類の勝負強い¹⁰³⁾ 鶏を飼っていて、友人たちにも分け前を取らせるのです。¹⁰⁴⁾

ある日、私はこの家畜小屋から自分がほしいだけのものを手に入れ、いつものように、船が通るのを見るために町から出かけました。すると海岸に一隻の船が停まり、商人たちが持ってきた商品を陸に揚げはじめました。

私はできるかぎり手伝いました。そして、船から降ろされた積荷に付いているそれぞれの名前をすべて書き留めていきました。

すると船長¹⁰⁵⁾がやってきて、陸に揚げた荷物を前にしてこう言いました。「この荷物¹⁰⁶⁾には海のシンドバードと書いてくれ。」

私は自分の名前を聞くや否や前に進んで言いました。「おお！旦那、この荷の持ち主はどこにいるんですか？」

彼は言いました。「そいつはバグダードから来た男で、私たちといっしょに船旅をしていたんだ。ある時、私たちは巨大な鯨の上に上陸した。その鯨は図体がでかすぎて動くのもままならず、背中に草や木々が生えてしまうほどだったので、私たちはそれを島だと思ったのだ。でも、起こした火で背中が熱くなったので、鯨は動き出して海に潜った。それで、何人かは溺れ死んでしまったのだが、船にたどり着いて助かったものもいた。

かわいそうなことだが、シンドバードは溺れてしまったのだよ。ここにあるのは彼の財産で、私たちはそれをもとに商いをしている。そのうち誰か彼の縁者を知っている人を見つけ、その人にこれを渡してもらおうと思っているのだ。」

思わず私は叫びました。「そのシンドバードとは、私です。後生だから、こっちに来て私の冒険談を聞いてください。」

しかし、船長は言いました。「おお、神よ、この世に誠実な人はもういないのか！私たちは彼が海で溺れ死ぬところを見たのだ。それなのに私たちの目には誠実そうに見えるあなたが、そのシンドバード本人だと言う。いい加減にしないで、そんな欲深いことは言うもんじゃない。」

私は言いました。「おお！旦那、ちょっと待ってください。時間は取らせませんので、まずは私の冒険の一部始終をお聴きください。私をここに連れてきてくれたのは、この町の王に仕える馬丁¹⁰⁷⁾たちなのです。」

それから町の人たちが船員たちのところにやってきて、私についてあれこれ話しました。船長の疑念は晴れました。合点が行った彼は、ついに私のことを思い出しました。そしてこちらを向いてやってくると私を抱きしめながら、こう言いました。「あなたの冒険には実に驚きました。これはあなたの財産です。どうぞお取りください。」

私は立ち上がって自分の所持品を受け取りました。そこから最も高価なものを

取り出すと、町の王であるミフラージュ¹⁰⁸⁾に自分の身に起こったことを説明した後、それを献上しました。そのことに王は前にも増して驚き、その島の珍しい品々を私に下さいました。

そして、私は前と同じ船に再び品物を持って乗り込みました。それからインドの島々で、沈香¹⁰⁹⁾、白檀¹¹⁰⁾、樟脳¹¹¹⁾、ナツメグ¹¹²⁾、アンズタケ¹¹³⁾、チェリープラム¹¹⁴⁾、ピッチョウカ¹¹⁵⁾、生姜¹¹⁶⁾の取引¹¹⁷⁾をしました¹¹⁸⁾。

私たちは島から島へと転々としてからバスラにたどり着き、そこからバグダードへと戻りました。十万ピストル¹¹⁹⁾にあたる品々を持って家に帰ると、家族や友人が出迎えてくれました。

私は召使いとして若い男女の奴隷を買い、いくばくかの財産と土地を手に入れました。

そして、私は家から外に出ずに気晴らしをして穏やかに過ごしました。こうして私は自分が味わった苦難の数々を忘れてしまい、過去にあった苦しい出来事はすべて私の心から消え去って行きました。

彼は第一の旅の話を終えた。そして、楽師たちに演奏するよう促し、踊ったり笑ったりして楽しんだ。

宴が終わると、彼は召使いに命じて 100 ミスカール¹²⁰⁾ [*ダカット¹²¹⁾]の金を持ってこさせ、シンドバードに与えて家に帰した。そして彼はシンドバードに次の日の朝また来るように言ったのである。

シンドバードは立ち去った。そして朝早くシンドバードのもとに赴くと、昨日暇を告げたときと同じように人が集まっていた。彼はいそいそと楽しい宴に加わった。それは夜まで続いた。

そうこうするうちにシンドバードは集まった者たちを静かにさせ、次のように言った。「皆さん、これから私がする話をお聞きください。これは私の二回目の旅での冒険の話です。それは最初の旅に負けず劣らず珍しくて不思議な話です。」

注

- 1) *Les mille et une nuit. Contes arabes*. Traduits en français par Mr Galland. Tome III. 1704, Paris: Chez la veuve de Claude Barbin, pp. 1-196. なお、ガラン版の初版では、タイトルは *Mille et*

- Une Nuit* となっているが、現在では *Mille et Une Nuits* と表記されることが多い。
- 2) 同写本はガラン写本と呼ばれ、3巻からなる。現在、パリのフランス国立図書館が所蔵している (Arabe 3609-3611)。3巻目は、282夜までしか含まず、カマルツザマーンの話の冒頭で突然終わっている。ガランの序文や日記などの記述から、4巻目もしくは5巻目までがあった可能性もあるが、現在までのところ見つかっていない。そのため、それらの失われた巻にシンドバード航海記が含まれていたとも考えられるが、その可能性は極めて低い。最近の研究によると、ガランが所蔵していた5巻本は、ガラン写本の3巻に加えて「目覚めて眠る者」などの物語が含まれているフランス国立図書館所蔵写本 (Arabe 3893)、さらに「愛の奴隷、アブー・アイユブの息子ガーニムの話」が含まれている、同じくフランス国立図書館所蔵写本 (Arabe 3893) である可能性が高い。しかしながら、後者の2巻とガラン版の物語との比較による文献言語学的な分析がまだ必要である。詳細については、西尾訳 (2019-2020) の第2巻に付けた解説の注5、および同じく第4巻の訳注30を参照。
 - 3) ガランが所有していたシンドバード航海記のアラビア語写本は二つあり、ともにパリのフランス国立図書館に所蔵されている (Arabe 3645ならびに Arabe 3646)。しかし、それら二つをガランの翻訳と比べてみると異なる点が多いため、それらがガランのシンドバード航海記の底本であったとは考えにくい。ガラン訳の底本は紛失したとするのが大方の見解であるが、一方でガランは『千一夜物語』の翻訳において、オリジナルのストーリーの超訳や改変をしばしばおこなっていることを勘案すると、シンドバード航海記の翻訳においても、アラビア語のテキストに手を加えた可能性もあり、最終的な判断は難しい。これらの二つの写本を含め、シンドバード航海記の写本のほとんどには夜番号が挿入されていない。その意味では『千一夜物語』内の他の物語の場合にならって、ガランが夜番号を意図的に挿入しと推定される。物語の内容についても、たとえば第三の航海の話に出てくる「一つ目の巨人」は、上記の二写本の中では「二つ目」であり、現存するシンドバード航海記のすべての写本と印刷本においても同じである。ガランがギリシアの物語を参考にした可能性が高い。
 - 4) シンドバード航海記の写本情報ならびに詳細な分類と系統関係の分析については、Nishio et Okamoto (2021) を参照。また、アラビアンナイトの校訂本におけるシンドバード航海記については、Marzolph and van Leeuwen (2004) を参照。
 - 5) 現在確認できる限りでは、A系統のテキストを含む唯一のアラビアンナイト写本である。
 - 6) ガランはシンドバード航海記がアラビアンナイトの一部であると信じていたが、彼の情報源が何であったかは判然としない。また、現在の研究でもシンドバード航海記がいつアラビアンナイトに取り込まれたかは解明されていない。おそらくはガラン版の出版後に挿入されたのではないと思われる。現在パリのフランス国立図書館に所蔵されているオスマン・トルコ語写本 (Turc 356) は、ガランの翻訳以前の17世紀のものだが、そこにはシンドバード航海記が含まれている。すでにガランの時代にはパリの図書館に所蔵されており、ガランもその存在を知っていたと思われる。ただしこの写本は合本であり、後代に物語が加えられた可能性もあり、今後の調査が待たれる。
 - 7) ド・ラ・クロワの生涯と著作については、Sebag (1978) と Nishio et Okamoto (2018) を参照。
 - 8) 本稿で取り上げるベティス・ド・ラ・クロワと彼の父親とは同名である。当時は親子が同じ名前というのも珍しくはなかったが、そのためにどれが息子の著作なのか、混同あるいは誤解されている場合が多々みられる。ちなみに父親は、ヨーロッパで初めて詳細なチンギス・ハーンの伝記を著したことで名高い (*Histoire du Grand Genghizcan premier empereur des anciens Mogols et Tartares*. 1710, Paris: Veuve Jombert.)。
 - 9) Doss (2012) によると、ド・ラ・クロワは書き言葉の古典アラビア語だけでなく、シリアの口語方言にも関心を寄せていた。言語習得の目的で、民話などの民間伝承を記録している。
 - 10) *Histoire de Timur-Bec, connu sous le nom du Grand Tamerlan, empereur des Mogols & Tartares, en forme de journal historique de ses victoires & conquêtes dans l'Asie & dans l'Europe*. Écrite en persan par Charfeddîn Ali Yezdi et traduite en français par François Pétis de La Croix, publ. par Alexandre-Louis-Marie Pétis de La Croix. 1722, Paris: Chez Robert-Marc d'Espilly.
 - 11) Extrait du journal du sieur François Pétis [de La Croix] professeur royal en arabe et secrétaire interprète entretenu en la Marine, publ. par M. Langlès dans *Relation de Dourry Effendi, ambassadeur de la Porte ottomane auprès du roi de Perse*. 1810, Paris: Ferra, Libraire, pp. 73-174.
 - 12) 同報告書は一部出版されているが、全体は未刊行である (Berthier 1996: 13; Sebag 1978:

- 95)。
- 13) 同書は現在未刊行で、手稿本としてフランス国立図書館に所蔵されている (Arabe 4462-4464)。
 - 14) このハーヅジ・ハリーフの書誌学的百科事典は、当時のオスマン帝国治下のアラブ地域も含めた文献情報を網羅したものであり、ガランが編纂に関わったイスラーム世界の百科事典である *La Bibliothèque orientale* の底本ともなっており、同じ書籍をド・ラ・クロワが翻訳していることは興味深い。
 - 15) François Pétis de La Croix, *Sindabad le marin. Traduction inédite de 1701. Édition critique et présentation*: Aboubakr Chraïbi et Ulrich Marzolph. 2016, Paris: Espaces & Signes. この校訂本ではフランス語の綴りがすべて現代語に直されている。ただし厳密な手法によるテキスト校訂とは言い難く、誤読や誤字が多々みられる。
 - 16) これら二つのミュンヘン版とクリーブランド版を照合し、校訂本を出版した (Nishio et Okamoto 2022)。
 - 17) フランス語の原文は以下の通りである « Ainsi est achevée la Copie de l’histoire de Sindabad Le Marin, Le Vendredi dixseptième Juin de l’an de Grace 1672. par les mains du pauvre Aslan, fils du Diacre Fathallah de la maison d’Aoün. » (Nishio et Okamoto 2022: 69)。
 - 18) ミュンヘン版では Oüacouaq, クリーブランド版では Oüaqaq と綴られている。また後者のアラビア語本文では al-waqāq とあり、ラテン語で ouaqaq と下に書かれている。1704 年に出版されたガラン訳では Vakvak となっており、注釈の中でガランはこれを日本に比定している。アラビア語では、ワクワークやワークワークとも呼ばれる。発音が「倭国」に近いことや、マルコ・ポーロのジパング伝説に類する記述がイスラーム世界の地理書・旅行記などにみられることから、かつては日本を指すとされていたが、現在では否定されている。
 - 19) Ms. Numéro BL. 1134 fols. 31-38, British Library.
 - 20) Ms. Numéro We. 707, Staatsbibliothek zu Berlin.
 - 21) Ms. Numéro SOAA 124. この SOAA と CFMM の二つのガルスニュー写本は、Hill Museum & Manuscript Library によって最近発見されデジタル化されたものである。同図書館では中東地域に現存するすべてのキリスト教関連写本のデジタル化プロジェクトを進めており、デジタル化された資料は世界の研究者にオープンアクセス可能となっている。ちなみに SOAA 写本の場合は、アレppoの教会に所蔵されていたものだが、近年の内戦によってすでに教会自体が破壊され、当該写本も焼失した。上記の両写本の使用について便宜をはかっていただいたことに謝意を表しておく。
 - 22) Ms. Numéro Mingana 146.
 - 23) Ms. Numéro CFMM 306.
 - 24) Ms. Numéro Gotha 2652.
 - 25) 中東地域における都市部中流層の興隆と識字層の出現の観点から考察した、アラビアンナイトのような民衆文学の成立過程については、Hanna (2003) および Nishio et al. (2017) を参照。
 - 26) アラビアンナイトのアラビア語原典の伝承におけるキリスト教徒の役割については、Sironval et Daaif (2013) を参照。特にシンドバード航海記については、西尾 (2018) および西尾・岡本 (2022) を参照。
 - 27) フランス語では « Marin », クリーブランド版のアラビア語では « bahri » となっており、どちらも「海の」という形容詞と「船乗り」という名詞で使われる。現在では「船乗りシンドバード」にあたる表現が児童書や映画などで使用されているが、以下の本文を読んでわかるように、シンドバードは「船乗り」というより「商人」である。またカルカット第二版などの別系統の物語では、ここに登場する「荷担ぎ屋シンドバード」の代わりに、「陸のシンドバード」が登場しており、そのことも考え合わせると、本来は「海のシンドバード」と訳すべきであろう。
 - 28) フランス語は « Sindabad » で、対応するアラビア語は « al-sindabād » となっている。ちなみにガラン版では « Sindbad » である。本訳では、慣例に近い「シンドバード」と表記する。
 - 29) 現在の Collège de France.
 - 30) 実際のフランス語での肩書は Lecteur et Professeur Ordinaire du Roy en langue Arabe で、日本語に直訳するならば「王命によるアラビア語の講師兼教授」となる。
 - 31) フランス語では « Avertissement »。この部分はド・ラ・クロワ自身による物語の梗概であ

- る。クリーブランド版も同様だが、同版に付いているアラビア語版にはこれに相当する部分はない。ちなみに、ガラン版にもこれに相当する部分はない。
- 32) フランス語では《Mihradge》。ガラン版では《Mihrage》。カルカッタ第二版ではミフラジャー。中世イスラーム地理書に頻出するマハラージュと同語だとすると、サンスクリット語で「大王」を意味するマハーラージャに相当する。
- 33) フランス語では《Rouk》。アラビア語では《rukhh》。英語では《roc》と書かれ、日本語でも「ロック鳥」と記されることもあるが、本訳ではアラビア語に倣って「ルフ鳥」と記す。
- 34) フランス語では《Haffasien》。
- 35) フランス語では《Ceylan》。
- 36) アッバース朝第五代カリフ（在位は、西暦786～809年）。
- 37) フランス語では《Hindabad》で、対応するアラビア語は《hindabād》となっている。ちなみにガラン版では《Hindbad》である。本訳では「ヒンドバード」と表記する。
- 38) フランス語では《Aloé》。アラビア語では《‘ūd》。
- 39) フランス語では《ambre》。アラビア語では《nadd》。「竜涎香」は通常アラビア語で《‘anbar》と呼ばれており、この写本の別の箇所ではこのアラビア語の単語が使われている。注61と比較。
- 40) フランス語では《tourterelles》、アラビア語では《qumfī》。
- 41) フランス語では《rossignols》、アラビア語では《hazār》。
- 42) フランス語では《harpes》、アラビア語では《junūk》。
- 43) フランス語では《violons》。アラビア語では《al-‘awtār wal-malāhī》となっており、直訳すると「弦と楽器」となっている。
- 44) フランス語では《hautbois》、アラビア語では《mazmār》。ただし、通常のアラビア語では《mizmār》と呼ばれる。
- 45) アラビア語では《al-baqla ma‘a al-khall》。最初の単語の《baqla》は「野菜」という意味と「そら豆」という意味がある。
- 46) フランス語では《officier》、アラビア語では《khādīm》。
- 47) フランス語では《pommes de senteurs》と書かれており、一般的には《pomandre》《pomme d’ambre》など同じ意味で使われ、「竜涎香」や「麝香」を練り込んだものを入れた小さなリング状の金属器を指す。ただし対応するアラビア語は《mashmūmāt》（mashmūmの単数形）で通常は「良いにおいの」「香り」「香水」「麝香」などを意味しているが、ここでは「香りが付けられた〔食べ物〕」と取るべきであろう。ちなみに、同じ語根の《shammām》は「メロン」を指す。
- 48) アラビア語ではこの部分は省略されている。
- 49) ガラン版では、この三つの格言のうち第三のものしか挙げられていない（西尾訳2019–2020:第2巻,7）。カルカッタ第二版では、三つの格言すべてが挙げられている（前嶋・池田訳1966–1992:第12巻,12）。プーラク版でも三つが揃っているが、第三の格言が異なっており、「墓は宮殿よりも価値がある。」となっている。「貧困」にあたるアラビア語がクリーブランド版では《al-fuqr》（正確なアラビア語は《al-faqr》）で、同じくカルカッタ第二版でも《al-faqr》であるが、プーラク版は《al-qasr》となっている。ちなみに前嶋・池田訳（1966–1992）では補注の部分で、カルカッタ第二版の《al-faqr》にあたる単語を《al-qaṣīr》と読んでプーラク版の《al-qasr》と関連付けて説明している（なお、《al-qaṣīr》を使っているアラビア語原文は在証されていない）。
- また最初の二つの格言については、旧約聖書の『伝道の書』中に相当する言葉が見つかるが、三番目については、ソロモンの格言を記したとされる『箴言』を含めて旧約聖書には見つからない。また、ベンシェイフ/ミケル訳によれば、この格言はイブン・アル・ムカッファの『カリラとディムナの書』にあるとしている（Bencheikh et Miquel 2006: tome II, 483, 1000）。
- なお、現在確認できるシンドバード航海記のアラビア語写本および印刷校訂本を確認したところ、すべての場合にここにある三つの格言が挙げられている。その意味でガランが参照した写本も同様であった可能性が高く、彼が何らかの理由で意図的に最初の二つの格言を割愛したであろう。またはすべての場合に《faqr》を使っており、プーラク版に確認される《qasr》はプレスラウ版にも確認できるが、正確には《al-qasr al-mushayyad》「荘厳な城」と形容詞がついている（プレスラウ版 第3巻目, 376–377）。また千一夜分を含むアラ

- ビアンナイト写本では、唯一いわゆるラインハルト写本のみが「qasr」を使っており (Reinhardt, vol.2, 43r), さらにシンドバード航海記の写本の中ではフランス国立図書館所蔵の BN3647 のみが使っている (BN 3647, 4r)。後者は 18 世紀の筆写であり、前者もブーラク版印刷の直前である 1831 年から翌年にかけて筆写されたとあるので、ブーラク版の校訂者が単独で修正を施したわけではなく、三番目の格言については二種類の本文伝承があったと考えるべきであろう (カルカッタ第二版, ブーラク版, プレスラウ版などの印刷版の書誌情報については, Marzolph and van Leeuwen (2004: 743–744) を参照)。
- 50) イスラーム世界の犬については, 西尾 (2022) を参照。
 - 51) ガラン版にはこの二つの格言は入っていない。一方で, カルカッタ第二版ではこの二つの格言に相当する詩が挿入されている。
 - 52) 「私は, ペルシア湾…」から次の段落の「…アビシニアの地があります」までの文章は, ガラン版にはあるがカルカッタ第二版にはない。
 - 53) フランス語では単純に「Golphe」として説明的に「le sein Persique」としている。ちなみにガラン版は「le golfe Persique」としている。クリーブランド版のアラビア語では, 「湾」を意味する「khalij」が使われておらず, 単に「海」を意味する「bahr」が使われている。
 - 54) «masālik」というアラビア語は, 「道, 行路」を意味する«maslak」の複数形。この単語は, たとえばイブン・ホルダーズベの有名な地理書『諸道と諸国の書 (kitāb al-masālik wa-l-mamālik)』のタイトルにも使われているように, 駅通制に基づく地理用語である。従って, ここにある«Bahr Almasālik」を文字通りに訳せば「諸道の海」となり, バスラからインド洋に出るには「定まった航路」があったことを想起させる。ここでの地理表記も含めて, ド・ラ・クロワ版シンドバード航海記には, イスラーム地理書の影響が色濃く残っている。
 - 55) アラビア語では«farsakh」。イランの古い距離単位でおよそ 6.4km に相当。もともとは馬がなみ足で一時間に走る距離を指していた。フランス語の「リユ (lieue)」は, メートル法採用前の距離の単位で, 約 4km に相当する。
 - 56) フランス語では«Zanguebar», アラビア語では«al-zanj」。ちなみに巻末の語彙集では, «zinj」とあり, 本文対訳と同じくラテン語で«zenguebaoi」となっている。ちなみに, アラビア語本文にはこの単語は登場しないが, 巻末の語彙集には地名のザンジバルにあたるアラビア語の«zinjīl», ラテン語の«zinjībal」が掲載されている。中世のイスラーム地理書では通常この地域は«bilād al-zanj」つまり「ザンジュの国」と書かれることが多く, 「ザンジバル」に対応する表現は用いられない。本訳のアラビア語版では«zanj」となっていることから, 日本語訳でも「ザンジュ」とすべきかもしれないが, ①フランス語が«Zanguebar」となっていること, ②ド・ラ・クロワが用いたアラビア語版とフランス語版の関係が明確ではないこと (部分的にせよアラビア語の文がフランス語の文をもとに作られた可能性が高い箇所が見られる) から, ここではフランス語の綴りに忠実に翻訳しておく。
 - 57) フランス語では«la mer rouge», アラビア語では«al-qulzum」。
 - 58) 「東方の海」はフランス語で«Ocean Oriental」となっており, 対応するアラビア語は«al-bahr al-sharqī」である。ちなみにガラン版では, 本来地中海東部を指す«la mer de Levant」を同じ意味で使用している。
 - 59) フランス語の綴りはミュンヘン版では«Oüacoüaq», クリーブランド版では«Oüaqaq」となっている。またアラビア語は«al-waqāq」となっている。ちなみに, ガラン版は«Vakvak」である。中世のアラビア語文献では«wāq», «waqwāq», «wāqwāq」と綴られることが多く, クリーブランド版のアラビア語の綴りはほとんど使われないものである。発音が「倭国」に近いことや, マルコ・ポーロのジパング伝説に類する記述がイスラーム世界の地理書・旅行記にみられることから, かつては日本を指すとされていたが, 現在では否定されている。
 - 60) フランス語では«Japon」となっているが, アラビア語版では「その島は, 日本の島々の方角にあります。」に相当する部分がなく, 「日本」にあたるアラビア語もない。ガラン版でも同様だが, «Vakvak」に付けた原注で, ガランは「これはおそらく日本の島々のことであると述べている。従って, 「ワークワーク」というアラビア語の地名が「日本」を指すという情報をガランがどこから得たかはわからないが, ド・ラ・クロワはおそらく, 「ワークワーク」→「倭国」→「日本」という推察からここでの訳文を加えたのかもしれない。その意味でクリーブランド版のアラビア語の«al-waqāq」という独特の単語は, 「倭国」の発音により近いものに変えられたのかもしれない。ただし, アラビア語版の成立過程については

検討すべきことが多く、ミュンヘン版の底本となったアラビア語版には日本に関わる文があった可能性も否定できない。どちらにせよ、ド・ラ・クロワ版は本文の物語中に「日本」が登場する唯一の『シンドバード航海記』である。

- 61) ここではアラビア語で「*anbar*」が使われている。注 39 と比較。
- 62) フランス語では「*tant rondes que longues*」となっており、直訳すると「丸くて長い」となる。アラビア語では「*al-'ambar wa-l-habb wa-l-lūlū*」となっており、最初の単語は「竜涎香」を指す。残りの二つの単語については、最後の単語（正確には「*lu'lu'*」）が「真珠」を指しており、その前の単語の「*habb*」は通常「種子」を意味している。クリーブランド版のラテン語対訳並びに巻末の語彙集では「*semen*」の訳語をあてており、通常の意味では「種」を示す。推察であるが、ラテン語の対訳の部分は「*Margarita ovum semen*」となっており、この二つの単語を合わせて意識したのであろう。
- 63) この一文はペルシア湾の真珠採りのことに言及しているが、ガラン版並びにカルカッタ第二版には相当する記述がない。
- 64) アラビア語では「*al-habasha*」。
- 65) フランス語では「*Pilote*」、アラビア語では「*nāyānī*」。このアラビア語の単語は通常の辞書では確認できない。巻末の語彙集では、「船乗り」を意味するラテン語の「*Nauta*」が訳語としてあてられている。尚、ガラン版では「船長 (*capitaine*)」となっている。
- 66) 「洗濯」の描写はカルカッタ第二版にはあるが、ガラン版では省略されている。
- 67) アステリクス記号でド・ラ・クロワによる原注を示す。この原注にある *Alhhaout* は、アラビア語で「クジラ」を表す単語「*hūt*」に定冠詞の「*al*」が付いた形に対応する。ちなみにアラビア語本文では「*hawt*」と読むように母音符号が付けられているが、巻末の語彙集では正確に「*hūt*」となっている。ガラン版とド・ラ・クロワ版は同じく「クジラ」としているが、カルカッタ第二版では単に「大魚」とのみある。ド・ラ・クロワ版のラテン語訳では、フランス語訳の「*baleine*」と同源の「*balaena*」ではなく、「*cetum*」（巻末の語彙集では「*cetus*」）という単語があてられている。ちなみに、鳥と間違えられるような巨大な海の生き物についての伝説は、古くはユダヤ教の口伝律法『タルムード』の中にも同様の記述が確認され、『シンドバード航海記』よりも以前の時代に遡る。古今東西の同様の伝承については、杉田（2010; 2015）を参照。
- 68) フランス語では「*des pieces de bois*」。ちなみに、ガラン版では「焚火をするために船から持ち出していた木切れ」となっている。また、カルカッタ第二版では「洗濯に使っていた木の**大盥**」となっている。
- 69) フランス語では「*Officiers de l'Ecurie du Roi*」。アラビア語ではこの「*officiers*」にあたる単語を「*suyās*」としている。巻末の語彙集ではラテン語で「*agasones*」があてられている。ただし、正則的なアラビア語では「*suyās*」（単数形は「*sā'is*」）。
- 70) フランス語では「*Mihiradge*」。ガラン版では「*Mihrage*」。カルカッタ第二版ではミフレーション。中世イスラーム地理書に類出するマハラージュと同語だとすると、サンスクリット語で「大王」を意味するマハーラージャに相当する。
- 71) フランス語では「*le Cheval marin*」、アラビア語では「*al-faras al-bahrī*」。
- 72) フランス語では「金銭」を意味する「*deniers*」であるが、アラビア語では「勅命」という意味の「*marsūm*」が使われている。
- 73) フランス語では「*Docteurs*」、アラビア語では「*'ulamā'*」。
- 74) フランス語では「*Rajas*」で、アラビア語では「*mulūk*」。
- 75) 以下のインドのカーストに関する記述は、ガラン版にはない。一方カルカッタ第二版には、同様の記述がみられるが、ド・ラ・クロワ版のほうがより詳しい。
- 76) フランス語では「*sectes*」、アラビア語では「*'ajnās*」（単数形は「*jins*」）。アラビア語の単語は「種族、性、民族、人種」などの意味を持つ。カルカッタ第二版でも同じ単語を使っており、インドのカーストを指すと思われるが、前嶋・池田訳（1966–1992）では「種姓」としている。
- 77) フランス語では「*Schakiria*」（ミュンヘン版ではこの単語に下線が引いてあるが、クリーブランド版では下線は引かれていない）、アラビア語では「*shākiriya*」。ここでは、アラビア語に従ってカタカナで音写しておく。この「シャーキリーヤ」は、一般にクシャトリアと呼ばれる種姓に相当する。
- 78) カルカッタ第二版ではまったく異なった記述になっていて、「これらは諸種姓中で、最も

- 高貴であり、他の誰をも虐げたり、誰にも暴力をふるったりはしない人びとである」とある。
- 79) フランス語では « Bracmane », アラビア語では « barāhana »。この「ブラフマン」はいわゆる「バラモン」のこと。
- 80) アラビア語版には「食事の際に」にあたる表現はない。
- 81) フランス語では « Chōūdyā », アラビア語では « shūdiya »。この「シューディーヤ」はおそらく「シュードラ」に相当する。「シューディーヤ」に関する記述はカルカッタ第二版にはみられず、同様の文言が「ブラフマン」に関することとして述べられている。
- 82) フランス語では « Dgammāles Arrachya », アラビア語では « al-jammāl al-rashīya »。
- 83) カルカッタ第二版では 72。ただ、イスラーム地理書のたとえばイブン・ホルダーズベの『諸道と諸国の書』では、ド・ラ・クロワ版と同じように 42 となっている。『シンドバード航海記』とイスラーム地理書の関係については、竹田 (1999) を参照。
- 84) フランス語では « sectes » のままだが、対応するアラビア語はここでは、「宗派」を意味する « milla » となっている。ちなみに、カルカッタ第二版では「種類」を意味する « sanf » を使っている。
- 85) フランス語では « Createur », アラビア語では « khāliq »。
- 86) フランス語では « Prophetes » だが、アラビア語では「預言者」を意味する « nabī » ではなく、「使徒」を意味する « rasūl » という単語の複数形 « rusul » が使われている。ちなみに巻末の語彙集ではラテン語の « Apostoli » があてられている。
- 87) 創造者と預言者のくぐりなどはカルカッタ第二版にはない。
- 88) 弓矢のことか？アラビア語では « tarkash »。
- 89) この一文はアラビア語では « la-hum al-rumh wa al-tarkash yaḥmilūna wa ya'qidūna bi-hi » となっており、日本語に訳すと「彼らは槍と矢筒を持っており、それを(いつも)身に付けて運んでいる」となる。
- 90) フランス語では « Magies », アラビア語では « najāyil »。巻末の語彙集によればこの « najāyil » の単数形は « najīla » で、ラテン語の説明がついている。
- 91) フランス語では « Cābil », アラビア語では « kābil » となっている。ガラン版では « Cassel », ラングレー版の仏訳部分では « Kācel » (アラビア語は母音符号がないが、おそらく « kāsil »), カルカッタ第二版では « kābil »。イスラーム地理書等の記述から、スンダ列島のどこかの島(スラウェシ [旧名セレベス] 島)に比定する説もある(竹田 1999: 257)。
- 92) フランス語では « tambours de basque », アラビア語では « daff »。
- 93) フランス語では « tambours », アラビア語では « ṭabl »。
- 94) フランス語では « Antechrist », アラビア語では « dajjāl »。ガラン版は « Degial » となっており、ガランは注釈で「イスラーム教徒が言うダッジャールとは反キリストのことである。彼らによればダッジャールは来世に出現して地上を征服するが、メッカ、メディナ、タルスス、エルサレムは天使に守られているため、入ることができない。」と述べている。ダッジャールは「偽救世主」とも訳される。ダッジャールに関するイスラーム教の伝承は錯綜しているが、ガランが挙げたメッカとメディナ以外の都市は言及がない。ダッジャールがエルサレムに入る前にリッダ(ロッド)の門でイエスが阻止するという伝承がある。ちなみにタルススはトルコ中南部の都市で、パウロの生誕地として有名。
- 95) フランス語では « brasse » となっており、昔の長さや深さの単位で両手を広げた長さに相当。アラビア語では同じ意味を表す « bā' » が使われている。一方ガラン版では、ひじから中指先端までの長さを示す « coudee » が使われており、カルカッタ第二版も同じ意味のアラビア語の « dhirā' » となっている。
- 96) アラビア語では « būm »。ガラン版では « hiboux » となっている。
- 97) この家畜小屋に関する部分は、ガラン版やカルカッタ第二版にはみられない記述である。
- 98) フランス語では « chapon » (「去勢された鶏」の意味)。
- 99) フランス語では « La poule enchantée »。アラビア語では « qumārī al-diyūk » となっており、巻末の語彙集ではラテン語では « galli Indici » (「インドの鶏」の意味)と訳されている。「qumārī」というアラビア語は、「シンドバード航海記」の他の箇所でも地名「クメール」に関わるものとして使われており、ド・ラ・クロワはおそらく、この « qumārī al-diyūk » という表現を「クマーリーと呼ばれる鶏」と解釈してラテン語で注記したのではないだろうか。ただこの « qumārī » という単語を、母音を変えて « qimārī » と読めば、« qimār » が「賭博」や「ゲーム」を意味していることから、「闘鶏」に関わる表現の可能性もある。

- 100) フランス語では「*Lotuis*」。ルイ十三世以降のルイ王の肖像入り金貨。アラビア語では、「黄金」を意味する「*dhahab*」とのみある。
- 101) フランス語の原文では、原注を省略すると「*la cuisse ou race victrice des coqs*」となり、「*cuisse*」という単語の意味が「*race*」に相当すると読める。実際にアラビア語では「*fakhdh al-dik al-ghālib*」となっており、最初の単語の「*fakhdh*」は通常の意味では「太もも」を意味するが、たとえばアラブの部族に関わる単語としては下位部族としての「支族」を指すように、特定の集団の一部を指す意味で用いられる。おそらくド・ラ・クロワは、「*fakhdh*」をフランス語で直訳してアラビア語の本来の意味として「*race*」に言い換えたとも思われるし、あるいは「*fakhdh*」=「*cuisse*」を「*race victrice des coqs*」に相当する鶏の種類の呼称とみなした可能性も高い。ただし、アラビア語の本来の意味は前者の解釈が適切であろう。
- 102) フランス語では「*La race victorieuse des coqs*」。クリーブランド版では「*La race victorieuses des coqs d'Inde*」となっており、注99で述べた「*galli Indici*」（インドの鶏）の意味を受けて変更が加えられたと考えられる。
- 103) 原文は「*race victrice des coqs*」だが、「*victrice*」という単語は通常のフランス語の辞書では確認できない。中世英語では同形の単語が確認でき、ラテン語の「*victrix*」が語源とされている。アラビア語の「*fakhdh al-dik al-ghālib*」という表現の中の「*ghālib*」の訳語にあたる。
- 104) 対応するアラビア語の文章を訳すと「*というは、王には勝負強い種類の鶏がいて、そのような鶏の所有者は利益を得ている*」となる。フランス語で「*amis*」（友人）と訳しているアラビア語の単語「*ṣāhib*」には、「友人」という意味と「所有者」という意味があり、おそらく後者の意味で解釈すべきであろう。
- 105) フランス語では「*Capitaine*」、アラビア語では「*ra'īs al-markab*」。
- 106) フランス語では「*dépost*」（現代綴りでは「*dépôt*」）、アラビア語では「*wad'ā*」となっており、「委託品」を意味する。
- 107) フランス語では「*Palfreniers*」、クリーブランド版では「*écuyers*」、アラビア語では「*suyās*」とあり、巻末の語彙集ではラテン語で「*agasones*」となっている。ただし標準的なアラビア語では、単数形が「*sā'is*」複数形が「*suyyās*」で、「騎手」の意味である。
- 108) フランス語では「*Almihiradge*」という異なった綴りが使われている。
- 109) フランス語では「*Aloës*」、アラビア語では「*awud*」。
- 110) フランス語では「*sandal*」、アラビア語では「*ṣandal*」。
- 111) フランス語では「*Camphre*」、アラビア語では「*kāfir*」。
- 112) フランス語では「*noix muscade*」、アラビア語では「*jawzabawwad*」。
- 113) フランス語では「*gerofle*」、アラビア語では「*qaranfīl*」。
- 114) フランス語では「*Mirabolan*」、アラビア語では「*qāqulla*」。
- 115) フランス語では「*cubèbe*」、アラビア語では「*kabāba*」。「ヒッコウカ」を指す。スダ列島原産のコショウ科のつる性低木で、実（クベバ）を薬用にした。
- 116) フランス語では「*gingembre*」、アラビア語では「*zanjafīl*」。
- 117) フランス語では「*negotiasmes*」（「商取引する」の意味）だが、アラビア語では「*ta'awwaḍa*」という「物々交換」を指す動詞が使われている。
- 118) 様々な品物の名前があるこの一文は、ガラン版にはあるがカルカッタ第二版では省略されている。
- 119) フランス語では「*pistolles*」（現代綴りでは「*pistole*」）、アラビア語では「*dīnār*」。クリーブランド版では「*ecus d'or*」（「エキユ金貨」の意味）となっている。
- 120) フランス語では「*Medicales*」、アラビア語では「*mithqāl*」。このアラビア語の単語は本来天秤で使用する「分銅」を指しているが、特定の重さの分銅を指す場合もある。時代と地域によって異なるが、1ミスカールは4.25グラム（イランではおよそ4.6グラム）に相当する。また、ディーナールと同義の金貨を指すこともある。
- 121) フランス語では「*Ducats*」。ちなみにガラン版では「*sequins*」となっている。
- 122) バイエルン州立図書館の書誌情報によると278S（頁）となっているが、これは書誌学的に正確ではない。この頁数はフランス語訳部分のみの頁数である。実際にはその前に付された訳者のド・ラ・クロワによる8頁の「はしがき」などがある。

参考文献

写本

ミュンヘン版

Cod. gall. 799

Histoire Arabe De Sindabad Le Marin. München: Bayerische Staatsbibliothek. 294 Seite.¹²²⁾

クリーブランド版

Q 385.3A P445H

Histoire Arabe de Sindabad le Marin. Cleveland: Cleveland Public Library. 156 ff.

研究書・論文

〈日本語〉

杉田英明

2010 「動く島の秘密——巨魚伝説の東西伝播」『外国語研究紀要』14: 1-35。

2015 「動く島の秘密——巨魚伝説の東西伝播」山中由里子編『〈驚異〉の文化史——中東とヨーロッパを中心に』pp. 237-255, 名古屋: 名古屋大学出版会。

竹田新

1999 「海のシンドバード物語とアラビア語地理書との関係について」『中東イスラム文化の諸相と言語研究 池田修先生ご退官記念論文集』pp. 255-274, 大阪: 大阪外国語大学。

西尾哲夫

2018 「キリスト教徒が伝えたシンドバード航海記」『季刊民族学』164: 73-78。

2022 「イブン・アルマルズバーン著『衣服を着た多くのものよりもイヌがすぐれている件についての書』」『国立民族学博物館研究報告』46(4): 593-668。

西尾哲夫訳

2019-2020 『ガラン版千一夜物語』全6巻, 東京: 岩波書店。

西尾哲夫・岡本尚子

2022 「みんぱく回遊——シンドバードが日本にやって来た?」『月刊みんぱく』46(12): 10-11。

前嶋信次・池田修訳

1966-1992 『アラビアン・ナイト』全18巻, 東京: 平凡社。

〈外国語〉

Abdel-Halim, Mohamed

1964 *Antoine Galland: sa vie et son œuvre*. Paris: A. G. Nizet.

Bencheikh, Jamel Eddine et André Miquel (Édition et trad.)

2005-2006 *Les Mille et Une Nuits*. 3 tomes. Paris: Gallimard.

Berthier, Annie

1996 Tripoli de Barbarie à la fin du XVII^e siècle d'après un mémoire inédit de François Pétis de La Croix. *Anatolia moderna - Yeni anadolu* 6: 13-30.

Casanova, Paul

1922 Notes sur les voyages de Sindbâd le marin. *Bulletin de l'Institut français d'archéologie orientale du Caire* 20: 113-198.

Doss, Madiha

2012 Une tradition didactique appliquée à l'arabe: les dialogues Pétis de La Croix-Savary. Dans Johannes den Heijer, Paolo La Spisa, et Laurence Tuerlinckx (éds.) *Autour de la langue arabe: Études présentées à Jacques Grand'Henry à l'occasion de son 70e anniversaire*, pp.

- 189–206. Louvain-la-Neuve: Peeters.
- Galland, Antoine
1704 *Les mille et une nuit. Contes arabes*. Traduits en français par Mr Galland. Tome III. Paris: Chez la veuve de Claude Barbin.
- Garcin, Jean-Claude
2013 *Pour une lecture historique des Mille et Une Nuits*. Paris: Sindbad.
- Gerhardt, Mia I.
1963 *The Art of Story-telling: A Literary Study of the Thousand and One Nights*. Leiden: Brill.
- Hanna, Nelly
2003 *In Praise of Books: A Cultural History of Cairo's Middle Class, Sixteenth to the Eighteenth Century*. Syracuse: Syracuse University Press.
- Khurdâdhbih, Ibn
1967 *Kitâb al-Masâlik wa'l-Mamâlik*. M. J. de Goeje (ed.) Leiden: E. J. Brill.
- Langlès, Louis Mathieu
1814 *Les voyages de Sind-Bâd le marin, et la ruse des femmes, contes arabes, traduction littérale accompagnée du texte et de notes*. Paris: L'Imprimerie Royale.
- Marzolph, Ulrich and Richard van Leeuwen
2004 *The Arabian Nights Encyclopedia*. 2 vols. Santa Barbara/Denver/Oxford: ABC-CLIO.
- Nishio, Tetsuo, Shizuka Nakamichi, Naoko Okamoto, and Akiko M. Sumi
2017 The Arabian Nights and Urban Middle-class Cultures in the Arab World: Revisiting the Formation of the So-called Egyptian Recension. *Minpaku Anthropology Newsletter* 44: 5–9.
- Nishio, Tetsuo et Naoko Okamoto
2018 Un document inédit à propos des ouvrages de François Pétis de La Croix (1653–1713). 『国立民族学博物館研究報告』 42(4): 411–433.
2021 L'Histoire de Sindbad le Marin est-elle de la littérature populaire?: Une approche nouvelle des relations entre tradition littéraire et culture populaire au Moyen-Orient. Dans Dominique Casajus, Tetsuo Nishio, François Pouillon, et Tsuyoshi Saito (éds.) *Sur la notion de culture populaire au Moyen-Orient Approches franco-japonaises croisées* (Senri Ethnological Reports 152), pp. 41–55. Osaka: National Museum of Ethnology.
2022 *Histoire arabe de Sindabad Le Marin par François Pétis de La Croix : Édition critique des manuscrits conservés à la Bibliothèque d'État de Bavière de Munich et à la Bibliothèque publique de Cleveland*. Osaka: Centre d'études du Moyen-Orient moderne du Musée national d'ethnologie.
- Sebag, Paul
1978 Sur deux orientalistes français du XVII^e siècle: F. Petis de La Croix et le sieur de La Croix. *Revue de l'Occident musulman et de la Méditerranée* 25: 89–117.
- Sironval, Margaret et Lahcen Daaïf
2013 Marges et espaces blancs dans le manuscrit arabe des *Mille et Une Nuits* d'Antoine Galland. Dans Christian Müller et Muriel Roiland-Rouabah (éds.) *Les non-dits du nom. Onomastique et documents en terres d'Islam. Mélanges offerts à Jacqueline Sublet*, pp. 85–126. Beyrouth: Presses de l'Ifpo.